

42360

教科書文庫

| |
|-----------------|
| 4 |
| 8/0 |
| 42-1938 |
| 200030- 1515 |

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

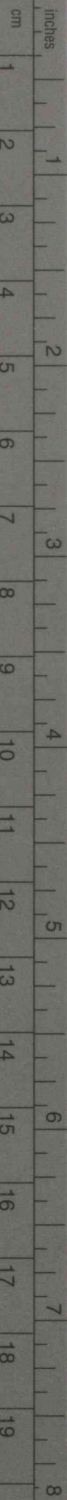


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Igl
資料室

女子國語讀本

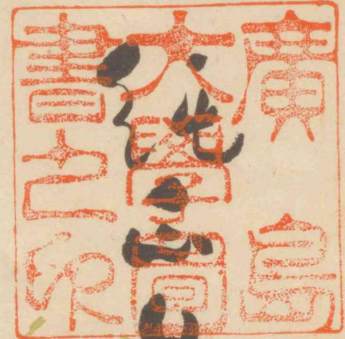
改訂版

卷五



資料室
375.9
I 81

昭和三十三年二月五日
文部省檢定濟
高等女子學校國語科用



文學博士 早稲田力編

女子國語讀本



早稲田書局出版

初雁の御歌

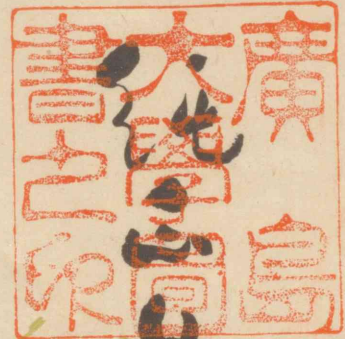
(明治神宮聖徳記念繪畫館壁畫)

女官
女官

昭憲皇太后

資料室
375.9
I 81

昭和三十三年二月五日
文部省檢定濟
高等女子學校國語科用



又學士 子國語書庫

女子國語書庫



早稲田書局出版

初雁の御歌



(明治神宮聖徳記念繪畫館壁畫)

昭憲皇太后

女官

女官

資料室
379
181

日五月二年三十國民
濟定檢省部文
用科語國校學女等第



隊舞の晝燈

(即帝帳宮聖齋宿念餘畫前繪畫)



文官

御憲皇太叔

女子國語讀本

女子國語讀本

早稲田書局出版



初雁の御歌

本圖は、昭憲皇太后が、明治十一年(三五〇)の秋、近侍の女官を従へさせられて、赤坂假
皇居の御苑を御遊遊ばさるゝ折から、空行く初雁を聞き召されて、北陸道御巡幸中の
明治天皇を偲ばせらるゝところである。御歌は左の通りで、

初雁をまつとはなしにこの秋は

越路の空の眺められつつ

女官これを拜聞し、御近詠數首と併せて越路の行在所に奏し奉つたと承る。

明治天皇が近代の大歌聖にましまして、御政務御多端の御身にあらせられながら御製十
萬首を超えさせられたことは、人の知るところであるが、昭憲皇太后もまたこの道に秀で
させられ、御歌の數も夥しく、三萬六千餘首に上つてゐる。本書に拜掲した十二徳の御歌
によつて、我々は陛下の御歌の御品位の高さ、御趣意の深さを想像することが出来る。

本圖の筆者は錦木清方氏である。氏は明治十一年生まれで、名は健一、父は明治初年の
小説家として名のあつた俵野探菊である。水野年方の門に入り浮世繪を學んだ。

卷五 目次

| | | | |
|---|----------------|-------|----|
| 一 | 昭憲皇太后十二徳の御歌(歌) | 編者 | 一 |
| 二 | 三重苦の聖女 | 松平定信 | 一四 |
| 三 | 櫻と松と燈火 | 薄田泣菫 | 一八 |
| 四 | 由良の思出(詩) | 佐佐木信綱 | 二一 |
| 五 | 野村望東尼 | 徳富蘇峰 | 三一 |
| 六 | 松下村塾 | 柴田鳩翁 | 三八 |
| 七 | 心の關守 | | |

| | | |
|-----------------|----------|----|
| 八 銀の皿その一 | 黒岩涙香 | 四九 |
| 九 銀の皿その二 | 黒岩涙香 | 五六 |
| 一〇 仕事の邪魔 | 編者 | 六二 |
| 一一 武藏坊(川柳) | (誹風柳多留) | 六五 |
| 一二 趣味の星座 | 山本一清 | 六七 |
| 一三 空 (歌) | (現代十一歌人) | 七五 |
| 一四 パレスチナ紀行 | 徳富蘆花 | 七八 |
| 一五 歸朝 | 島崎藤村 | 八五 |
| 一六 歐米婦人に何を學ぶべきか | 高良富子 | 八九 |
| 一七 日本帝國の萌芽 | 西村眞次 | 九七 |

| | | |
|-------------|-------|-----|
| 一八 日本の眞珠 | 川村多實二 | 一〇六 |
| 一九 夏日小品 | 岡本かの子 | 一一五 |
| 二〇 快活な朝食(詩) | 中西悟堂 | 一一九 |
| 二一 風景と建築 | 渡邊十千郎 | 一二三 |
| 二二 西湖の美觀 | 佐々木指月 | 一三一 |
| 二三 兩國橋 | 石川雅望 | 一三六 |
| 二四 火災と地震 | 鴨長明 | 一四五 |
| 二五 人間生活と自然 | 吉江喬松 | 一五〇 |
| 二六 鯛引(俳句) | 正岡子規 | 一五七 |
| 二七 柿 | 編者 | 一五九 |

二八 我が古文學の概観

編者 一六九



純正女子國語讀本 卷五

一 昭憲皇太后十二徳の御歌

春の花紅葉の秋のさかづきも
花の春紅葉の秋のさかづきも

ほどほどにこそくままほしけれ

清 潔

有心
しろたへの衣の塵は拂へども

憂きはこころのくもりなりけり

勤 勞

磨かずば玉の光は出でざらん

ほどほどにこそくままほしけれ
衣の塵
憂きはこころのくもりなりけり

一 昭憲皇太后十二徳の御歌

人の心もかくこそあるらし

沈黙

かりそめの言葉
もあだに散らさ
ざらなん

過ぎたるは及ばざりけりかりそめの
言葉もあだに散らさざらなん

確志

人心かからましかば白玉の

眞玉は火にも焼かれざりけり

誠實

とりどりにつくるかざしの花もあれど
にほふころのうるはしきかな

溫和

みだるべきをりをばおきて花櫻
まづ笑むほどを習ひてしがな

かざしの花

みだるべきをり
をばおきて

謙遜

高山の影をうつして行く水の

ひききにつくを心ともがな

順序

奥深き道もきはめんものごとの

本末をだにたがへざりせば

節儉

くれ竹のほどよき節をたがへずば

末葉の露もみだれざらまし

寧靜

いかさまに身は碎くともむら肝の

心はゆたにあるべかりけり

公義

末葉の露

むら肝の心はゆ
たに

世間一般の正
道

國民をすくはん道も近きより

おしおよぼさん遠きさかひに

二 三重苦の聖女

「闇は不滅の魂の躍進を阻むものではない」と、ヘレン・ケラー女史は言つてゐる。盲聾啞の三重苦に喘ぎながら、つひに世界一流の學者、社會事業家となり、慈愛、光明の聖女とまで仰がれるやうになつた彼女の生涯は、まことに闇を衝いて躍り進んだ魂の奇蹟ともいふべきであらう。この「奇蹟」の聖女が櫻咲く日本の春を慕つて、異國の不幸な人たちを慰むべく、昭和十二年四月の十五日に横濱入港の郵船淺間丸で來朝した。而して朝野の歓迎を受けたことはいふまでもなく、十七日には特に觀櫻の御宴に召されて、畏くも兩陛下の御握手をさへ賜つたのである。

一八八〇年
明治十三年
タスカムピア
ポストンを距る
千五百哩。

彼女から永久に
聲を奪ひ、同時
に二つの眼と二
つの耳とを閉し
て了つた。



(中央) 巖ソムトと(端左) 史女-ラー

ヘレン・ケラー女史は西曆一八八〇年の六月二十七日を以て、北米アラバマ州の北部タスカムピアといふ緑の蔦茂る片田舎に呱呱の聲を擧げた。やがてかぐはしい薔薇の花咲く庭を、よちよちと歩いては、一家の愛を集めてゐたが、幸福の日は長くは續かなかつた。生後十九箇月の冬二月の或日、彼女は突然、劇烈な病魔に胃と腦とを犯された。一時は醫者も匙を投げた程の重症で、小さな生命は幸を取りとめられたが、意地わるき病魔が彼女から永久に聲を奪ひ、同時に二つの眼と二つの耳とを閉して了つたのである。

意思—意志

目なし、耳なし、口なしの哀しい不具になつた二歳足らずの少女は、いつしか、いたいけな身振をして自分の意思を他人に傳へることを始めた。首を振れば「ノウ」、うなづけば「イエス」、引張るのが「カム」、押すのが「ゴウ」、これが自然に發生した最初の身振で、段々、パンが欲しくなればバタを附ける眞似をし、アイスクリームが欲しくなれば器械を廻す眞似をし、冷たいことを示すとは慄へて見せるなどの複雑なる意思表示を試みるやうになつた。

闇の底を手さぐりて生きて行く少女に取つて、唯一の光明は父母の愛であつた。けれども兩親の愛のみで彼女を偉大にすることは出来なかつた。此の見えず、聞えず、もの言へぬ少女を今日の大偉大な女性に仕上げることは神の思召であつたのであらう。而して此の神意を成さんが爲めに遣された天使、それは一八八七年の三月三日、ヘレンが満七歳になる三箇月前に彼女の家を訪れた

家庭教師アンニー・サリヴン嬢であつた。

「私は近づいて來る足音を感じましたので、母だとばかり思ひ込んで兩手を差出しました。さうして次の瞬間に、私は私の先生——私の心の眼をあらゆるものに向つて開いて下さるため、いゝえ、それよりも何よりも私を愛するため來て下さつた先生の兩腕の中に、強く抱き上げられてゐたのでした。」とケラー女史は、私の生涯といふ自叙傳の一節に、その日の事を書いてゐる。この先生はまづ土産に持つて來た人形を與へて、少女の手に *doll* といふ四つの文字を綴つた。少女はそれを眞似た。それから先生は毎 *pin, cup, hand* などの文字を根氣強く教へていつた。哀れな少女は、それが言葉を綴つてゐるのだといふことや、文字といふものがこの世に存在してゐることなどをば勿論知らず、たゞこの「指の遊戯」の面白さに、先生の眞似をしては指を動かさず、上手に

覺えたとき褒められては、子供らしい悦と得意さにはしやぎ廻るのであつた。

或日、先生は冷たい水を汲んで来て、少女の手に water と書いた。少女は突然、何か知ら忘れてゐたものを思ひ出すやうな、神秘的な自覺を感じた。この時初めて water は不思議な冷たい物の名であることを知り、そして今自分は「水」といふ言葉と文字を習つてゐるといふことに氣がついたのである。この一事が少女の魂の眼をさました、そして光と望と悦とを與へた。それから急に熱心になつて澤山の言葉を覺えるやうにつとめたが、この少女に物を教へることが、いかに困難で、いかに忍耐のいる仕事であつたかは、想像するに餘りがある。

彼女がものを言ふ術を學び始めたのは十一歳の三月であつた。彼女は以前から何でも音を出すものが好きで、猫が喉を鳴らした

吠え。

マサチユセツツ
州ボストン市ニ
ユーベリー街。

り、犬が吠えたりするのを手で觸つては喜んだ。或は、母や先生の顔に兩手を置いて唇の動きを感じ、ピアノを叩いて、音響の觸覺を悦ぶことも度々であつた。千八百九十年、サリヴン先生はホレィスマン聾學校長のサラ・フリー嬢の許に彼女を連れて行つて發聲の練習を始めさせた。彼女が最初に習つたのは「暖い」といふ單語であつたが、之を發音し得た時の驚きと喜びとは非常なものであつた。更に進んで第十一課を終つた時には「私はもう啞ではない。」と言つて有頂天になつて悦んだ。そしてお母さんや妹と話をしてみたくて歸る日が待ちきれなかつたといふことである。十五歳の夏にはサリヴン先生と共に紐育に出かけ、その秋ライト・ヒューマソン聾啞學校に入つて、更に二箇年間、發聲法、讀唇法、指話法を學び、同時に算術、地文、フランス語、ドイツ語等を勉強した。不思議な天才少女として、世間は彼女に驚異の耳目をあつめた。

「大きくなつたら大學へ行く。彼女が幼な心に抱いてゐた夢想の實現される時が來た。一八九六年の十月、その準備として、大學附屬のケムブリツヂ女學校に入學した。こんな生徒は初めてなので學校側にも難色やまが有り、家庭側でも反對する人が多かつたが、彼女の意志は曲ぐべくもなかつた。

教室では、サリヴン先生がついてゐて、授業の全部を指で通譯した。先生にとつてその骨折は全く言語に絶するものであつた。授業を全部指話するだけでも既に容易な業ではないのに、その上自習時間に辭書を引いて點字に寫し直し、タイプライターに打ち換へて教へねばならぬのである。が、それを學ぶ彼女の忍苦も一通りではなかつたであらう。かくして選擇科目のドイツ語、フランス語、ラテン語、英語、ギリシヤ語、ローマ史を優秀な成績で修了して、更にラドクリツフ大學の入學試験に合格したのは、千九百年の

十月、彼女が滿二十歳の時で、これは世界の教育史上に特筆すべき事であつた。

石にひしがれた雜草も猶生命の芽生を見せるやうに、彼女は闇と沈黙の中から光と音との世界に入つた。而して遂に人間の完成へ、不幸な人間の救濟へと進んだ。

彼女が拔群の成績で大學を卒業したのは、千九百四年であつたが、その後更に法學博士、人道博士の稱號を受ける榮譽を擔ひ、近き將來に於てノーベル賞受賞候補の一人にさへ數へられてゐる。

而して數々の講演や著述によつて獲得した約十萬ドルを社會事業や、自分と同じ不幸な人々に惜しげもなく提供して、自らは質素な生活の裡に感謝と喜悅とを見出してゐる。

彼女は科學、文學、宗教、哲學等各方面の書物を讀破し、美術、音樂を鑑賞し、動植物を愛し、子供を愛し、舟遊び、碁將棋、カルタあらゆるも

1 グラスゴウ大學から
2 テンプル大學から

のに趣味を有つてゐる。そしてその手の觸れる所一切の事物を
知り、人心の微妙な動きをさへ感ずるといふ。文豪マークトエー
ンが「二十世紀の奇蹟」と讃へ、大統領ルーズベルトが「アメリカの國
寶」と誇つたのも無理ではない。

聖女の師サリヴン嬢(後メーシー夫人)は一八六六年、マサチューセ
ッツ州のフイディングヒルスといふ貧民部落に半盲目の不仕合
せな子として生れた。そして貧民病院に育ち、盲啞學校に送られ
て二十一歳の時卒業した。自分の過去を顧みて同じ不幸な人達
の教育に一生を獻げようと決意した時、三重苦の少女の家庭
教師に懇請され、溢るゝ愛情と撓まぬ努力とを以て、遂に「奇蹟を作
る人」となり、教育界の「コロムバス」と呼ばれ、ケラー女史と共に人道
博士の稱號を贈られ、盲人の騎士と並べ稱せられた。聖女をして
今日あらしめた、この隠れた聖母は、昨年七十歳で數奇の生涯を終

弛々
七

昨年
二五九六年。

2600
660
1940

口演
啞者としては巧
みながら馴れぬ
人には聴きとら
れない。

フオーレスト・
ヒル
ニューヨークを
距る十五哩の郊
外。

つた。

今一人忘れてならない女性は、今回の來朝に隨行したポーリー・
タムソン嬢である。今、ケラー女史の影身にそうて、女史の身の廻
り一切の世話をし、日本人の言葉を、指と唇の動きで女史に傳へ、女
史の口演又は指話を通譯する、一人二役、三役の難儀な務を果しつ
つあるのが、この人である。本年五十二歳、今から二十三年前にス
コットランドから渡米し、ケラー女史の許に來つて、女中から事務
員となり、秘書となつて二十年、女史と一身体になり、全く自己を
没却して殉教的奉仕を續けてゐる。いはゆる「杜の丘の三女性」中、
サリヴン亡き後の嬢はケラー女史の事業に對して益々重要性を
加へつゝある。

三重の苦艱を克服した奇蹟の聖女はいふまでもなく、その陰に
かくれて偉業の合作に與つた他の女性の超人的な忍苦努力も亦

二三重苦の聖女。

一一三

尊敬されねばならぬ。而してこの三女性から聖火を胸に點ぜられる者は、單に「不幸な人達」ばかりではないであらう。

三 櫻と松と燈火

松 平 定 信

無きと聞けば有りといはまほしく、悪しきといふをば善きと事かへていはんこそ、いとねぢけたることなれ。櫻てふ花は、我が國のものなるを、唐國にもありとて、さま／＼例など引きつくれど、櫻かいたるもろこしの畫もなく、かなへりと思ふ詩もなければ、無しとこそ言ふべけれ。いでや櫻と言はでしも、花とだにいへば、異木にはまぎれぬものを、ほの／＼と明け行く山際、雲か雪かとばかり咲きみちたるも、霞こめたる夕まぐれ、花のけはひも、朧ろに見えて、こゝにのみ暮れ残す景色などいふは、浅かりけり。まいて、夢ののびやかなれば、近劣りするなどいふは、彼のことがへて才おふ心に

松平定信
江戸時代好學の名君
白河藩主越中守老中上座
樂翁と號す
文政十二年(三賢)
亡歿、年七十二

近劣り。

強意

日本 支那 英 伊 米
カクヲ ボクシ バラ ヲクシ ヲクシ
クナシ

すべて言葉もて
言ひ盡くさんと
思ふは、いと淺
き心かな。



いふことなりかし。風に散りかふも、雨にぬるゝも、遠山に見るも、軒端にむかふも、明ほのも、夕暮も、露のひるまも、目かるゝ時しなき

を、ことに我が國ぶりの姿にて、枝もすなほに花のかたちもゆたけく、匂さへもこちたからぬも、あやしきまで、こそ覺ゆるものなれ。さるをいづこにもありといふは、さらなり、曙夕暮などとおもしろからんやうに、言葉添ふるは、いまだ深くそめし心には、あらざりけり。すべて言葉もて言ひ盡くさんと思ふは、いと淺き心かな。

或人の庭見しが、松の枝をため葉をすかし、一草一本皆作り立ててけり。まして石などは、様々の色あるをも、並べわけ大なるも、小

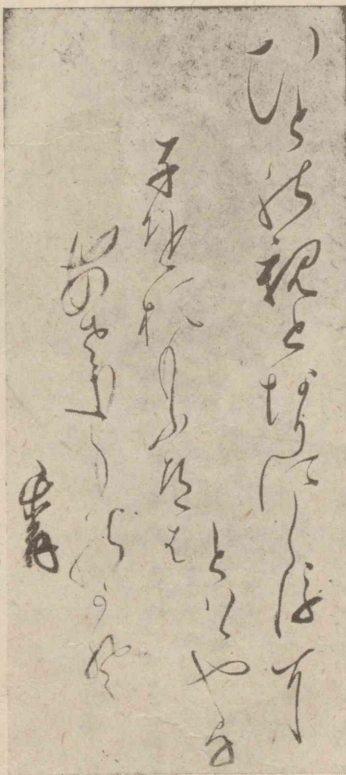
三 櫻と松と燈火

一五

たゞすまひ。

世の人我が好むところにあふものばほめのしり、心にあはぬものをば譏りなどすれど、理盡くして思ふにはあらず。ひとの親となりにし後にとはばやな子をおもふ道はあさきものと 樂翁

なるも、たゞすまひをかしくしなしたるを、翁ことに褒めにけり。歸りて後に、翁のつね好み給ふは、草は階前より立ちのび、松も檜原も、おのがまゝになしおき給ふかと思へば、今日の庭をば殊にほめ給ふはいかにと問ふ。「何もさせる理なし。世の人我が好むところにあふものを



松平定信筆蹟

ばほめのしり、心にあはぬものをば譏りなどすれど、理盡くして思ふにはあらず。ひとの親となりにし後にとはばやな子をおもふ道はあさきものと 樂翁

いへば、室町の頃の庭の残れるを見ても知るべし、野山の景色なすも、また假につくりなせしなり。實にさまざまの石などおもしろかれと爲したるは、おもしろからぬやうもなし。翁が庭はといへば、おのがまゝになすにて、古の庭などの意とも違へば、心高きわけもなし。紅紫の色はよきとて賞しぬれど、衣にして翁など着まほしとは思はざるなり。我が心に違へば、そしるは、みな道理知らぬもののすることや。

雲の上のやんごとなき君おはしましけり。その御子の御かたはらにましましけるが、外面より風の吹き来て、ともしびの光定まらざりければ、人召して風の吹き来るぞ。ともしびも消えなん。障子たてよといひ給ひければ、父君殊にわかり給ひて、さやうなる言葉遣しては、歌はいかでか詠むべきとて、むづかり給へば、御子い

さやうなる言葉遣しては、歌はいかでか詠むべき。

花月草紙
樂翁の隨筆集。
初に花月のこと
を長く書いてゐ
るのでかく名づ
けた。

薄田泣菫
詩人、隨筆家
名は淳介
岡山縣の人
明治十年生

とおそれて退き給へり。御次にゐたるもの、いかゞしたる御教ぞ
と思ひて、御色うかゞひ問ひ奉りければ、ものを盡くしていふべき
ものにはあらずと宣ひしとぞ。
(『花月草紙』)

四 由良の思出

薄田泣菫

春の夜はしづかに更けぬ。
はゆま路の並木のけぶり、
箱馬車は轍をどりて、
宮津より由良へ急ぎぬ。

朧夜の窓のあかりに、
京むすめ、難波商人、
朽尼や、切戸まうてや、

人の世の旅の道
づれ。

人の世の旅の道づれ。

おくびまじり。
清らなる聲。
ささら水なみ。

物がたりおくびまじりに、
眠り目のとろむとすれば、
誰が子にかしりへの方に、
をりからの追分節や。

清らなる聲ひとしきり、
溪あひのささら水なみ、
咽び音に響きわたれば、
乗合は涙こぼれぬ。

月落ちて闇の夜ぶかに、

箱馬車は由良へとどきぬ。
客人は車をおりて、
西東みちに別れぬ。

えこそ忘れぬ。

人人のところに
生きて、
とことばに姿ぞ
わかき。

その後や幾春へけむ、
おほかたは夢にうつつに、
しのびてはえこそ忘れぬ、
由良の夜の追分上手。
その子いま何處にあらむ、
思ひでの清きかたみや、
人人のところに生きて、
とことばに姿ぞわかき。

(二十五絃)

五 野村望東尼

佐佐木 信綱

佐佐木信綱
歌人、國文學者
文學博士
號は竹柏園
三重縣の人
明治五年生
世の荒波。
波瀾の多い生
涯。

日本歴史上の大偉業たる明治維新の時代は、忠勇義烈なる幾多の義人志士を生んだ。それらの義人志士の妻や母の中には幾多の尊敬すべき女丈夫もあつた。しかしながらそれらの義人志士と交り、婦人ながらも世の荒波と戦つて勤王の大事に盡くし、波瀾の多い生涯を送つた婦人は極めて稀であつたが、こゝに記さうとする野村望東尼は、その稀なる者の一人である。そして、望東尼はたゞに慷慨清節の女丈夫であつたのみではなく、我が國古來のすぐれた女歌人の一人であつた。

望東尼は初の名をもとといった。筑前福岡の人で、ロシア人が蝦夷を侵して、我が邊鄙を脅した文化三年に、浦野勝幸といふ人の三女として生まれた。長ずるに随つて、姿が美しく、歌を好んで書

文化三年
(一四六)

天保三年
(二四三)

大隈言道

徳川時代末期の
歌人。姓は清原、
名は清助。明治
元年(三三)歿、
年七十一。

輕妙奇拔。

弘化二年
(二四五)



野村望東尼

道、裁縫、刺繡のわざにもすぐれてゐた。同藩の士野村貞貫といふ人のもとに嫁いて後は、よくその家を治め、先妻の子をおほしたてつゝ、妻たり、母たる務をも十分に盡くした。しかもその間に、かねて好める和歌にいそしんで、天保三年二十七歳の時、夫貞貫と共に福岡の歌人大隈言道の門に入った。言道はその名こそ廣く知られてゐないが、歌才に於ては近世第一流のうち、に數へられるべき歌人で、その歌風は輕妙奇拔、しかも一種の新しみを有つてゐた。望東尼がこの師に就いたのは、彼女のためにまことに幸であつた。彼女は十分に師の歌風の妙味を學び、師もまた深く彼女に許した。望東尼は弘化二年、四十歳の時、家督を長子に譲つて、夫と共に福

風月を楽しむ
情懷。

時勢の大波
嘉永六年
(二五二)

岡の郊外なる平尾山の山莊に閑居した。その後、この山莊に風月を楽しんだ折々の歌は、いかにも情懷のなつかしく偲ばれるもののみである。その二三を擧げてみると、
春きぬとつげの小櫛もとらなくにエレルにせず
笑ふ人だになき山べかな
葺きかふる物とも知らずわが庵の
屋根のうねうねおふる姫松
雨晴れて月見る夜半はやり水の
音もほどよく流れぬるかな
しかもこの山莊に隠れすむ彼女の心をも動かしたのは時勢の大波であつた。嘉永六年米艦が浦賀に來た時の作に、
こと國の船はうき世の浪たてて
いどみがほにも打ちよせしかな

安政六年

(五二九)

といふのがある。山莊に共に住むこと十五年、安政六年七月二十
八日、彼女が五十四歳の時に夫は逝いた。その時の歌に、

初秋の風に吹かるともし火の

かげもころも細る夜半かな

彼女は直ちに剃髪して佛門に入り、その名の「もと」をさながらに取
つて望東尼といつた。

彼女の夫貞貫も、夙に勤王の志のあつた人で、山莊に移り住んで
から、或は楠公の靈を祀つてこれに仕へ、或は『太平記』のたぐひを講
じなどしてゐたが、まだ活動の時機に逢はずして死んだのであつ
た。望東尼もかやうな人を夫として、かねて同じ勤王の志に燃え
てゐたのであつたが、夫を亡つた頃から、國事はますます多端にな
つて、次々に彼女の心を刺激した。彼女はとう／＼閑居に堪へず、
文久元年の、ちやうど和宮御降嫁のことがあつたのに際して京都

太平記

室町時代に多く
出た軍記物語の

文久元年

(五三二)

和宮

第二百二十代仁孝
天皇の第八皇
女、孝明天皇の
御妹。文久元年
十二月、第十四
代將軍徳川家茂
に御降嫁。後、
落飾して靜寛院
宮といふ。

山櫻日本心の清
ければ散るも開
くもなづみなく
して 望東

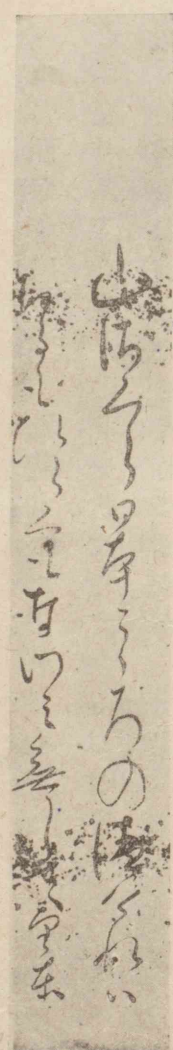
に上つた。そして皇居を拜み、檀原御陵を拜しては皇祖の偉業を
しのび、湊川なる楠公の墓に詣でては、

かしこしとぬかづくうちも我が袖の

みなと川水せきぞかねつる

と詠んだりした。

京阪の旅行中に見聞した刺激は、彼女の勤王心をますます燃え
立たした。當時の福岡藩もまた勤王佐幕の兩派に分れて、盛んに



望東尼筆蹟

争つてゐたが、今や望東尼が平尾の山莊は、決して風流の一隱宅で
はなかつた。彼女は盛んに當時の志士と交際して、彼等を激励し、
彼等のために山莊を用立てては、或は密議所となし、或は宿泊所と

なして、隱然勤王の士の保護者たる地位を占むるに至つた。さうして彼女の生涯が波瀾曲折の中に入ると共に、彼女の和歌はいよいよ熱烈なる女丈夫の面影を映して來た。

僧月照が薩摩へ下つた時も、この山莊に宿つた。平野國臣とは殊に交りが深く、度々山莊を訪はれて多くの贈答をなした。或時、國臣を宿して旅立たせた時に、國臣が、

忍びつつ旅立ちそむる今宵とて

山かげふかきやどりをぞする

と歌つたのに和して、

ひとすぢにあかき道ゆく中やどに

かしてうれしき山のあれ庵

をしからぬ命ながかれ櫻ばな

雲居に咲かん春を見るべく

月照

京都清水寺の住職。安政五年(三五〇)西郷隆盛と共に海に投じて歿した。

平野國臣

福岡藩士、幕末の勤王家、歌人。文久三年(三五三)斬死。

高杉晋作

長州藩士、吉田松陰の高弟、勤王家。慶應三年(三五七)歿、年二十九。

元治元年

(1860)

最後を飾る最も光輝ある一幕。

と詠んで贈つたこともあつた。月照と共にその山莊の客であつた高杉晋作の如きは、殊に親しき者の一人であつた。

當時福岡の藩論は、佐幕派が優勢であつたが、元治元年大獄を起して勤王派に壓迫を加へた時、その餘波が望東尼に及んで、彼女はまづ座敷牢に幽閉され、續いて玄海の孤島姫島に配流の身となつた。時に彼女は既に六十の高齡であつたが、牢居二年、辛うじて高杉晋作のために救はれることを得た。この二年にわたる姫島幽閉は、實に彼女の一生の最後を飾る最も光輝ある一幕で、その酸苦を極めた牢獄ずまひは、事毎に彼女の卓絶した人格をかゝやかしめたが、同時に彼女をしてその生涯に於ける最もすぐれた歌の數を作らしめた。當時の筆録は『姫島日記』といはれて、三部一巻をなしてゐるが、その中の歌文、いづれとして血涙の跡をとゞめぬはない。

姫島は五里の沖中にある小さい孤島である。そして牢獄は狭い四疊の荒板敷で、まはりには松の檻木を組み、荒格子を構へて、海の見える南の方にのみ小さな窓をあけたものであつた。

彼女がまだ座敷牢にゐた時から、いよいよ姫島に幽閉されて、脱獄するに至るまでに成つた多くの作のうちから、數首を左に抜き出だしてみる。

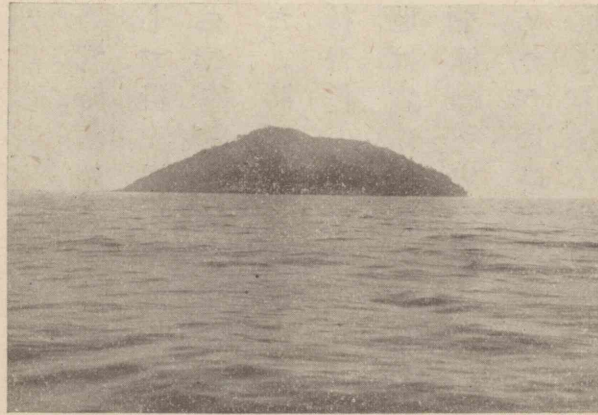
浮雲のかゝるもよしやものふの

大和心の數に入りなば

一たびは野分の風のはらはずば

清くはならじ秋のおほぞら

これはまだ座敷牢にゐた時の作である。



望遠の島姫

住みそむるひとやの枕うちつけに

さけぶばかりの波の音かな

りともし火のあるにほこりて家にては

うとくも過ぎし冬の夜の月

も流れこしうき身忘れてむかへてん

いづこも御代の春ぞと思へば

彼女はこの幽閉中、同志の志士の處刑せられた報を聞いて、悲しみのあまり般若心經を血書して、その遺族に贈つた。その奥に記した歌に、

おくれゐてかくもかひなし法の文

よみがへり來んつてならなくに

かくて高杉のために救はれて馬關に遁れたが、間もなく高杉は病を得て逝いた。望東尼は日夜看病に努め、痛惜の情をもつてこ

般若心經
佛敎の眞諦を非
常に簡潔に説い
た經文。般若は
智慧の義。

150) 4500

玉の緒。

吉田松陰

長州萩の藩士、

名は寅次郎、勤

王家、安政六年

(五) 斬死、年

二十九。

慶應三年

(三五七)

の同志の親友と永訣した。その後彼女は、山口に移つて、同志の間に尊敬された。そして比較的安穩の生涯に入り、薩長の聯合軍が討幕に上るめつた門出を祝つたが、それから間もなく病を得て病床に横たはつた。病中の彼女は、長州侯からは特別の待遇を受け、同志からは熱心に看護せられたが、終に起たず、六十二歳を一期として、この女丈夫の玉の緒は絶えた。吉田松陰の妹小田村氏の夫人も山口から来て、彼女の最後の病床に侍した。時に慶應三年十一月六日、明治維新の大業のまさに成らうとする時であつた。彼女の辭世には、

花浦の松の葉白くおく霜の

きゆるもあはれ一さかりかな

この美しい一首の調べは、この女丈夫も、その末期には、やさしい女歌人の本來にかへつたことを語つてゐるやうに見える。

靖國神社

國家の忠臣義士

を合祀する別格

官幣社、東京市

麴町區九段にあ

る。

彼女の功績は、歿後に於て大いに認められ、明治の初年に至り正五位に敘して、靖國神社に祀られた。また平尾山莊には弟子達の志によつて立派な記念碑が建てられた。彼女が志士としての偉業は、今や殆ど十分表彰し盡くされたといつてもよい。但し歌人としての彼女の面目は、いまだ十分に世に知られない憾がある。これが私の特に彼女を紹介した所以である。

六 松下村塾

徳富蘇峰

徳富蘇峰

文學者、歴史家

貴族院議員

前國民新聞社長

名は猪一郎

熊本縣の人

文久三年生

天成の鼓吹者、自ら己を空しうして他の善を採るを禁ずる能はず。

吉田松陰は天成の鼓吹者なり。彼自ら己を空しうして他の善を採るを禁ずる能はざるのみならず、また他をして自己の精神意氣に同化するを禁ずる能はざらしむる力を有しき。これを彼が特色とす。蹈海の策破れて下田の獄に繋がる、や、獄卒に説くに、自國を尊び、外國を卑しみ綱常を重んじ、彛倫を敘すべきを以てし

綱常を重んじ、
彝倫を敍づべき
を以てして、狼
の目より涙を流
さしめたり。

檻輿云々

安政元年(三三) 三月のこと。

申度き事は中々
盡き申さぬが先
づ九枚で置き申
候。此間は御文下され
觀音様の御洗米三
日の内精進にて、
戴き候様との御
感事、御深切の御
潔齋などは随分心
の堅まり候もの存
に宜敷き事と存候
二日付、拙者も三月
晦日、酒肴共一志の
候へば、申さず其間
給べ、申さず其間
一度靈神様御祭の
もの頂戴

松下村塾

長門國萩の城下
にある。

て狼の目より涙を流さしめたり。その下田より檻輿江戸に赴き、
途三島を経るや、警護の賤夫に向ひて大義を説き、彼等をして、憤勵
の氣色に現れしめたり。その江戸に在りし時、後また送られて長

ト云ふや、そとに松下村塾
は、松下村塾に於てこれを見る。松下村塾は幕府顛覆の卵を孵化
したる保育場の一なり。維新改革の天火を燃やしたる聖壇の一

吉田松陰筆蹟

門野山の獄に投ぜられし時、その感
化は同囚者に及び、獄卒に及び、司獄
者までも彼の門人となるに至らし
めたり。彼が在るところ、四圍みな
彼が如き人を生ず。これ何により
て然るか。薔薇の在るところ土も

また芳しといふにあらずや。

而して彼が最もその鼓吹者たり感激者たるの特質を顯したる
は、松下村塾に於てこれを見る。松下村塾は幕府顛覆の卵を孵化
したる保育場の一なり。維新改革の天火を燃やしたる聖壇の一

松下村塾は幕府
顛覆の卵を孵化
したる保育場の
一なり。

流風遺韻今に及
んで、なほ人を
して欽仰歎美の
情を禁ずる能は
ざらしむ。

家に蟄居す。

なり。笑ふ勿れ、その火、燐よりも微かに、その卵、豆よりも小なりし
と。赤間關の砲臺は粉にすべし、奇兵隊の名は滅すべし。されど、
松下村塾に至つては、獨り當時に偉大なる結果を遺ししのみなら
ず、流風遺韻今に及んで、なほ人をして欽仰歎美の情を禁ずる能は
ざらしむるものあるにあらずや。

彼は安政二年十二月、野山の獄より出でて家に蟄居せしめられ
たり。而してその翌年七月に至つて、蟄居中更に家學を授くるの
許可を得たり。その名義とするところは山鹿流軍學なりと雖も、
その實は然らず。彼は謂はゆる専門的兵法家にあらず。彼は改
革家なり。その教ふるところは改革の精神なり、その講ずるとこ
ろは改革の偉業なり。

蓋し松陰が自ら松下村塾に直接の關係を有したるは、僅かに安
政三年の七月より同五年の十二月までの間にして、即ちその歲月

彼何を以てかくの如き大感化を及したるか。曰くその人に在り、曰くその時勢に在り、曰くその教育の目的に在り、曰くその教育の方法に在り。

白鹿洞の先生
宋の朱熹

橄欖林の夫子
ギリシャのアリストテレス

彼は僅かに二十七歳の壯者にして、要するにこれ白面の中書生のみ

は二年有半に過ぎず。而してこの二年有半の歲月が、未來の日本歴史に於ける千波萬濤の激起點となりたるは何ぞや。彼何を以てかくの如き大感化を及したるか。曰くその人に在り、曰くその時勢にあり、曰くその教育の目的に

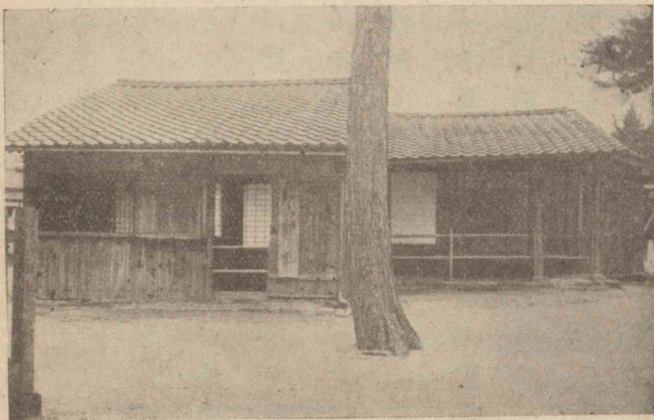


吉あり、曰くその教育の方法に在り。田先生にあらざ。彼は宇宙を呑み幽陰明を窮むる橄欖林の夫子にあらず。

要するにこれ白面の中書生のみ。而して彼が實力よりも多くの感化を人に及し、彼が人物と匹敵する、或點に於ては寧ろ彼より優れたる弟子を出したるは何故ぞ。「感在知己」の一句、これを説明して餘りあるべし。

造化兒の手に成りたる精神的爆裂彈

彼は造化兒の手に成りたる精神的爆裂彈なり。一たび物に觸



松 下 村 塾

この時に於ては、物も碎け、彼もまた碎着すれば轟然として星火を飛ばす。彼の全體は燃質にて組織せられたり。火氣に接すれば忽ち焰となる。その焰となるや、銀をも鎔かすなり、金をも鎔かすなり、石をも鎔かすなり、瓦をも鎔かすなり。彼の人に接するや、全心を擧げて接す。彼の人を愛するや、全力を擧げて愛す。彼は往々インスピレーションのために精神的高潮に上る。而してこれを以て他に接し、他を導いてこの高潮に達せしむ。知るべし、彼が教育の道多岐な

至誠にして云々
(孟子離婁章句
上の語)

隆冬苦寒を凌が
んがために、互
に負戴抱擁す。
艱難は同情を生
じ、同情は恩愛
を生ず。
知己の感を以て
弟子を陶冶せ

した。己が眞骨頭、大本領を據べて、以て他に及すのみなるを。
彼の門人を遇する、一に赤心を以てす。「至誠にして動かざるも
のは未だこれあらず」とは、彼が人に接し物を待つ金誠なり。彼は
よく言ふよりも、寧ろよくこれを行へり。而してこの精神を以て
その所信を他に施すが故に、その傳道心に至つては、この山を彼處
に移すほどの勢力ありしなり。彼が眼中には敵もなく味方もな
く、たゞ彼が濟度すべき衆生あるのみ。彼は社會の寵孫にあらず。
彼が子弟もまた然り。彼等は恰も雪を蹈んでアルプの嶺を攀づ
る旅客の如し。その隆冬苦寒を凌がんがためには、互に負戴抱擁
し、自他の體温によりてその呼吸を保たざるべからず。艱難は同
情を生じ、同情は恩愛を生ず。先生前に斃れて、弟子後に振るふ。
彼は知己の感を以て弟子を陶冶せり、激勵せり。彼は活ける模
範となりて、子弟に先だちて難に殉ぜり。否、子弟のために難に殉

り、激勵せり。彼
は子弟に先だち
て難に殉ぜり。
否、子弟のため
に難に殉ぜり。
豈徒然として止
まんや。

一人を以て云々
夫レ國ハ一人ヲ
以テ興リ一人ヲ
以テ亡ブ。(蘇洵
管仲論)

ぜり。この時に於ては、懦夫と雖もなほ起つべし。況んや平生の
素養あるものに於てをや、況んや恩愛の情、知己の感あるものに於
てをや。彼はその子弟に向つて、「我が如く做せ」と言へり。而して
做せり。彼等豈徒然として止まんや。

その時を以てすれば、纔かに二年有半に満たず、その所を以てす
れば、たゞ萩城の東郊にある杉氏邸内の八疊の矮屋にして、その特
に増築したるものも、別に十疊半の一室を加へたるに過ぎず。而
してこの中より無數の活劇及び活劇を演じたる大立物を出した
る所以のもの、豈その由るところなくして然るを得んや。世或は
一人を以て興り、或は一人を以て亡ぶ。箇人の社會に及す勢力も
また輕視すべからざるなり。

(「吉田松陰」)

柴田鳩翁

江戸の心學者

名は亭

京都の人

天保十年(一四九七)歿、年五十七

七心の關守

書

柴田鳩翁

何事も則をこえゆく世の人の

心にかたき關守もがな

古は國々に關をすゑて守りの人をつけ、往來の人をあらため、その子細なき者はこれを通し、子細ある者はこれを止めて都に告ぐる、いはゆる美濃の國には不破の關、攝津の國には須磨の關、或は逢坂、または木幡など、これなり。今この歌の意義は、人常におそれ敬むの心を存して私欲を拒ぐことは、猶ほ關を守りて旅人を留むるが如く、その善惡を知らまほしとなり。然らざれば私欲常に本心をくらまして、人の道を遠ざかること多からむと、うち歎きたるさまなり。關守の譬喩甚だ有難いことぢや。これ則ち明德を明らかにするの手段、日新の工夫でござります。されば名々どもが人

明德

大學ノ道ハ明德

ヲ明ラカニヌルニ在リ。(大學)

人の道を失ひまするは、たゞおれがおれがの身鼠身勝手より起るもの、たゞ心にしつかり敬み畏るゝところがあれば、人の道がつとまらず。

一尺
約三十センチ。
一間
約百八十二センチ。

江戸中を大根大根と泣きあるく。
米買へ、酒買へ、醬油買へ、油買へ。

の道を失ひまするは、たゞおれがの身鼠身勝手より起るもの、たゞ心にしつかり敬み畏るゝところがあれば、人の道がつとまらず。さすれば心は大切の關所ぢや。こゝで油斷を致してうかうかすると、どのやうな悪事を思ひつかうやら、甚だ怖いものぢや。これについて、恐しい話がござります。

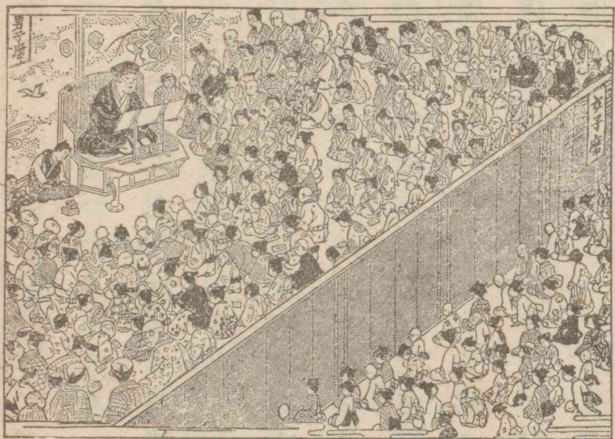
所は江戸の神田邊と聞いたが、名は何とやら申して、至つて貧乏な暮し方、夫婦に子供三人、亭主といふは三十四五、女房は二十八九、家は九尺二間の裏店、鼠の巢を見るやうな住居、商賣は何と取定めたこともなう、朝は朝寝し、夜は夜ふかし、針を藏に積んでもたまらぬ身持ゆゑ、とうとう貧乏の底になつて、せうことなしに青物賣と出かけ、四五百文の錢で親子五人がその日暮し、朝五百文で、土物店で大根を買うて、その日一日江戸中を大根々と泣きあるいて、暮方に七百文ばかりにし、内へ戻ると、米買へ、酒買へ、醬油買へ、油買へ、

こんな話はお子
たちも。

日さしを見れ
ばはや晝過ぎ、
腹の時計は八つ
さがり、財布の
中にはまだ一文
の錢もたまた
らず。
この大根が暮方

薪買へ、子供の鼻薬まで、二百の錢で明日一日の軍用金残つた五百は即ち明日の商賣の元手、一日休むと一日食はずにゐねばならぬ、小ぜはしない身代、その中から無理無體に雨が降るといふなまけかた、親子日休み、頭痛がするといふては晝から歸るといふなまけかた、親子五人が食はずにゐること、折々あると聞きました。こんな話は御子たちも、よう聞いてお置きなさるが宜しい。これはこれちひさい時に、父さまや母さまのおつしやる事を聞かなんだ報いで、成人してこのやうな罰があたつて、難儀な暮しをせねばならぬ。随分御両親の仰しやる事を、よう聞かねばなりません。さて彼の大根賣が、例の通り、一荷の大根を荷ひ、朝早うから賣りあるいた。ところが、どうしたことやら、その日は一把の大根も賣れぬ。日さしを見ればはや晝過ぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中にはまだ一文の錢もたまたらず。これはつまらぬ、この大根が暮方までに七百

までに七百文の
錢に化けぬと、
忽ち明日は釜の
中に蜘蛛の巢が
はる。
まづ知行にあり
ついた。



心學道話の模様

文の錢に化けぬと、忽ち明日は釜の中に蜘蛛の巢がはる、どうした
らよからうと工夫しながら、いつの間やら兩國橋を渡り、本庄の
屋敷町を大根々と賣り歩いた。
ある屋敷の表長屋の窓の内から、コ
レ大根屋と呼ぶ。ヤレうれしや、ま
づ知行にありついたらと、呼ぶ所を見
れば、表御門から右へ三つ目のむし
こ窓の内から呼んだのちや。そこ
で大根屋が表御門から荷をになひ
込んでお長屋へ廻つて見ると、門か
ら三軒目の高塀のうち、門口には何
某と標札が打つてある。荷を持ち
込んで見れば、縁さきの障子をあげ、旦那殿が今月代を剃られたと

損が立つ。

心の關所が油斷

見えて、鏡立に向うて自分の髪を結ひながら、その大根はいくらぢやといふ。百に三把でございますといへば、それは高い、二十四文づつにしておけといはるゝ。賣りたさは賣りたけれども、現在の損の立つことなれば、どうぞ三把に御買ひなされて下されい、今朝から江戸中を泣きあるいて、まだ一把も賣りませぬ、どうでも賣つて歸らねばならぬ大根、掛直は一切申しませぬといふ。かのお侍がかぶり振り、それでも高い、まからずば先づよしにせう、邪魔ながら持つて歸れと言ひ捨てて、縁先の障子をはたと閉められた。大根屋もいろ／＼と言うて見ても、かの侍が相手にならぬ。そこで仕様もやうもなく、ハテ詰まらぬ、もう日の入るに間もなし、なんでも四五百の錢を持つてかへらぬと、親子五人の、明日の命が繫がれぬ、何としたものであらうと、手を組んで思案をしながら、縁前の銅盥かまどにふツと目がついた。こゝが大事の聞き所ぢや。心の關所が油

なく番してゐたら、銅盥に目はつかぬ筈ぢや。

今まで廣かつた世界が立ちどころに狭うなつて、五尺の身體をしばらくもおおくことがならぬ。

斷なく番してゐたら、銅盥に目はつかぬ筈ぢや。そこでかの大根賣が、縁さきの障子は閉めてある、あたりに見る人はなし、かの銅盥を水の入つたまゝで、大根二三把の下へ、そつとかくす。怖いものぢや、今まで廣かつた世界が立ちどころに狭うなつて、五尺の身體からだをしばらくもおおくことがならぬ。そこで荷をかつぎ出して、門口を出ようとすると、障子の内から、「これ大根屋」と呼びかけられる。ぬからぬ顔で「まかりませぬ」といふと、「いや／＼直ねはねぎるまい、その大根買はう」と言ひざま、障子をさらりと明けられた。大根屋もびっくりしたが、どうぞして逃げて往なうと思ひ、何把ほど入りまする、はした賣は出來ませぬ」と言ふ。「いや／＼、はしたでは買はぬ、その大根皆買はう、この縁さきへならべて呉れ」と言はれる。サア大根屋も一生懸命、障子のしまつてゐるうちなら、銅盥の出しやうもあらうに、今さら銅盥が出されもせず、というて賣るまいとも言

百千萬の後悔も
今になつては間
に合はず。

惣身に冷汗。

はれず逃げ行かうにも、荷を捨てて歸つてはならず、百千萬の後悔も今になつては間に合はず、うろ／＼としてゐると、かのお侍が大根屋の顔をキツと見て、「われはきつううろたへてゐるぞよ、まづ銅盥から出して、大根の敷をかぞへて見よ」と言はるゝ。大根屋は惣身に冷汗を流してもう切られるか、ぶたれるかと、わな／＼ふるへながら、銅盥を恥づかしさうにソツと出して、土に手をつき、旦那様眞平御免なされて下さりませ。何を隠しませう、先刻も申しまする通り、今朝からまだ一文の商も致しませず、このまゝ歸りますると、明日親子五人が食べますることがなりません。悲しい貧の盗み根性、面目次第もござりませぬ。六つを頭に子供が三人、どうぞ親子五人が命を御助けなされて下さりませ」と色青ざめて、土に頭をすりつけて詫言する。かのお侍、思ひの外氣立のよい人で、更に立腹のけしきも見えず、「いや／＼その詫言に及ばぬ。まづ大根の

面目次第

敷をよんで

敷をよんで見よ」と言はるゝ。怖々ながら大根を縁に積み上げたところが、二十三把。かのお侍、やがて七百六十四文の錢を取出だし、かの大根賣を呼んで、「サアその方がいふ通りに二十三把、七百六十四文、序に銅盥を添へて遣はす。貧の盗とはいひながら、われが根性は餘程よごれてゐると見える。この銅盥は顔や手足を洗ふ道具なれど、たゞ顔手足を洗ふばかりではあるまい、心の洗ひやうもありさうなものぢや。無禮は咎めぬ。この銅盥を遣はす。持つて歸つてとツくりと思案をし、心の垢を洗ひ落せ」と言ひ捨て、障子をしめて内へはひる。大根屋は夢見たやうに、有難いやら、恥づかしいやら、禮も言はれず、詮方なさに銅盥と錢を荷の中へ入れて、早々にかの屋敷を逃げて出て、始めて生きたやうに覺えたが、恥づかしいと思ふ心が、腹のうちに横たはつて鬱々と家に歸る。常ならば小歌うたひながら、門口をはひると、荷籠を投げ捨てて、錢財

心の洗ひやうも
ありさうなもの
ぢや。無禮は咎
めぬ。この銅盥
を遣はす。持つ
て歸つてとツく
りと思案をし、
心の垢を洗ひ落
せ。

鬱々と

でかし顔でさはいする。

ねぢ込み

あやまつた狐殿のやうに。

御託宣を上げてみても。

たくしかけて。

布を提げ、庭に立つてゐながら、まづ翌日の手配りぢや。百が米買へ、二十四文が薪を買へ、十六文が油買へと、子供の鼻薬から今夜の寝酒の肴まで、残るところもなう、でかし顔でさはいするところなれど、今日は何と申うてやら、いつにない門口をソツとはひり、しほしほ上り口に腰をかけて、草鞋の紐を解かうともせず、物をも言はずさし俯いてゐる。女房は櫛まき頭に乳呑子を懐へねぢ込み埃掃持たせたら、三寶荒神ともいふべき勢、一調子はり上げて、賣上の錢をも見せず、あやまつた狐殿のやうに、俯いてばかり居ねむつてゐるのか、但しは食ひ酔うて戻つたのかと御託宣を上げて見ても、一言も返答せぬ。そこで女房が合點ゆかず、荷の中を見れば、賣上の錢もそのまゝ、外に見なれぬ銅盃があるゆゑ、これはこなたどこから持つて歸らつしやつた。こちの内には不似合な銅盃、顔つきといひ、銅盃といひ、何ぞわけがありさうな。とたくしかけて問ひ詰

孟子

名は軻、周代鄭の人。孔子に私淑し、亞聖と稱せられた。

羞惡の心は義の端なり。

首の座に直る。

お侍は観音様ぢや、則ち刀尋段段壞の功德でござります。

める。こゝで亭主も面目なげに、今日の始末をいちぶ始終話し、さてさて其方が手前も面目ない。と始めて夢がさめて來た。これがこれ有難いものぢや、かのお侍が心を洗へと御意見の一言、大根賣の腹に横たはつたは、孟子のいはゆる羞惡の心は義の端なりと仰せられたもこれぢや。この恥づかしいと思ふは本心の發見、恥をさへ忘れねば、人は身の立つもの、幸にこの大根賣はよいお侍に出あうて、有難い御意見に預つたので、本心に立ち戻られた。若しこの時に銅盃を盗みおぼせたら、段々盗に面白味がついて、始に恐しいと思ふたのが、後には心よう覺えるやうになる。この大根賣も後には大盗人にもなり、首の座に直るやうになるのぢやけれど、かのお侍の御意見の聲が耳に入つて、立ち戻りが出來て見れば、首斬られる氣遣はない。これで見ればお侍は観音様ぢや、則ち刀尋段段壞の功德でござります。洛東清水寺の御寶前にかけたる繪馬

を見ますれば、罪人が縛られて、首の座に直つて、首をさしのべて居ると、その後、太刀取が太刀をふり上げてゐる。その上の方に觀音様のお姿があらはれて、光明を放つてござると、太刀が段々に折れてあるところが書いてある。これが刀尋段々壞の功德を書きあらはしたもので、皆心の事ぢや。心さへ正しければ刃向ふつるぎはないものぢや。かるが故に仁者に敵なしとも申してある。さればこの大根賣も、これから女、夫心を合はせ、本心になつて晝夜働き、終に三年目に相應の八百屋になつて、はじめてかの銅盃を侍の方へもどし、厚う御禮を申して、この御屋敷の御出入になりました。これが舊染の汚水を洗濯したと申すものでござります。ある人の歌に、

舊染の汚水を洗濯した。

ふりにける奈良の都のならはしも
あらたまりゆく君が誠に

鳩翁道話

柴田鳩翁の道徳訓話の筆記を集めたもので、翁の子武修の編輯にかゝる。

(「鳩翁道話」)

黒岩涙香

明治大正の操觚家
萬朝報社長
名は周六
高知縣の人
大正九年(三五八〇)
歿、年五十九

八 銀 の 皿 その一

黒 岩 涙 香

あとは明晩お話し申しませう。

僧正は僧侶の中での極めて高い身分である。この國當時の官制では、陸軍大將のすぐ次に位する格式を持つてゐた。今旅人が戸を開けて入つたのは、その僧正なる人の家であつた。しかも十年前にこの地の寺領を預つて以來、ミリエル僧正といへば、殆ど慈善の神様のやうに思はれてゐる、その僧正の家であつた。

僧正は本年七十五歳になるが、家族としては、自分より十歳ほど年下の妹と、一人の老女とがあるだけである。彼が始めてこの土地へ赴任した時、すぐに貧民病院を見廻つたが、その建物の狭くむさくるしいのを見て、後述する、この王宮に代りて、広い立派な自分の官宅と取替へた。三人だけの家族に何も広い住居はいらぬから、それよりは多勢の貧しい

病人にゆつくりさせたいといふ意見から出たのである。この一
事でも大方その人柄が察せられる。彼は年々政府から一萬五千
フランの俸給を得たが、その中の一萬四千フランをば、年々悉く慈



ユーゴー
(1802-85)
ユーゴーは本課
の原作者でフラ
ンスの詩人、小
説家。

善事業に寄付し、自分はたゞ残りの
一千フランと、妹の身に附いた所得
の五百フランとで、極めて質素に暮
らしてゐる。その後、それでは餘りひ
どいからといふ老女の苦情によつ
て、別に地方政廳から馬車代として
一年三千フランを受けることになつたが、この三千フランをも、す
ぐに悉く他の慈善事業に寄付することに取極めた。これからと
いふもの、土地の人がすつかりその徳に感じて、恵み金の類をば、す
べてこの僧正の手に託することになつた。これがため、年々僧正

授ける豊かな人
よりは、どうし
ても受ける貧し
い人の方が多い
ので。

凡そ人の難儀と
あれば、どのや
うな危難を冒し
てもこれを救
ふ。この點では
慈善家たるのみ
でなく、勇者で
ある。

の手を經る慈善の金額は實に夥しい高である。けれども授ける
豊かな人よりは、どうしても受ける貧しい人の方が多いので、僧正
のためになる金とては一錢もない。のみならず、時々は分け與へ
るのに不足して、自分の乏しい家計をそれに廻すことがあつた。
僧正は凡そ人の難儀とあれば、どのやうな危難を冒してもこれ
を救ふ。この點では、慈善家たるのみでなく、勇者である。けれど
も、僧正は世間一般の宗教家のやうに、決してやかましい意見を有
つてゐるのではない。僧正は本來由緒のある家に生まれ、華美と
贅澤との中に育つた人で、たゞ革命の亂のために家を失ひ、亂をイ
タリヤへ避けてゐるうちに、最愛の妻に死なれて、それがために世
をはかなみ、發心して宗教に歸したのであつた。だから、僧正も若
い時には、普通の俗人と同じやうな行をしたのであらう、多少は過
もあつたであらう。それは自分でも常にいふことで、随つて人に

肉體といふ重い荷物を背負つてゐる。

轉んで膝を突くのは仕方がないから、突いたらすぐにその膝で神に縋るのだ。完全といふは神より外にはないので、人には望んでも及ばぬことである。人はたゞ正直にすればよい。

説く意見も柔かて無理がなかつた。まづ、かうだ。「なんでも人といふ者は、肉體といふ重い荷物を背負つてゐるので、この荷物が常に慾心や過のもととなるから、油斷なくこれを見張つてゐねばならぬ。出来るだけはこれを抑へつけ、これに勝つやうにつとめて、萬止むを得ぬ場合にはこれに従ふがよい。従へば罪となるのだけれど、全く止むを得ぬ場合ならば許されるであらう。轉んで膝を突くのは仕方がないから、突いたらすぐにその膝で神に縋るのだ。完全といふは神より外にないので、人には望んでも及ばぬことである。人はたゞ正直にすればよい。過つて罪を犯しても、たゞ正直を忘れるな。一生懸命に罪を少くするやうに勉める、それが人の道だ。全く罪のないのは神ばかりだ。罪といふは肉體に籠つてゐる引力のやうなものだ」と、かういふ風で、説き聞かせることが一々人情をかみわけた優しい意見ばかり、これでは人の服

するのにも無理はない。

この夜、僧正は夕方の散歩から歸つて、それから室に閉ぢ籠つて書きものをしてゐた。ところへ、夜食の用意が出来たと見えて、老女が来て戸棚から銀製のソップ皿を出して行つた。ソップの皿が銀製とは、この平民主義の僧正に不似合のやうだけれども、これは先祖から傳はつた大事の寶物で、僧正にはこの銀の皿に盛つたソップを吸ふのが、たゞ一つの贅澤なのである。皿は都合六枚の一組で、その外に銀の燭臺が二つある。これも親類から形見として貰つたので、いつもストーヴの上の棚に、對にして揃へて置いて、客のある時に用ゐてゐる。

よく規律の立つた家だから、老女が皿を出しに来ると直ぐに食事だ。僧正はさうと知つて、書きものをやめて勝手へ行つた。それは食堂と玄關とを兼ねた室で、戸を明けると直ぐに往來だ。不

都合な建て方のやうだが、貧民病院をそのまゝ住居にしてゐるの

だから、仕方がない。



僧正の家を訪れたチャガルブ・チャガ

さて僧正が食堂へ行つたのは、ちやうど老女が僧正の妹に向つて、宵に買物に出た時、町で聞いて來たといふ、恐しい旅人の話をしてゐた時であつた。「それは何でも、十九年といふ長い間、懲役をしてゐた奴だといひますから、今夜はきつと何處かへはひりますよ。町中みんな怖がつて、もう戸を締めて居ります。こちらでも、入口と戸棚の錠を早くかけなければなりません。銀の皿を盗まれては大變でございますからね。」

僧正の家には、
秘密もなく都合
といふものもな
い。難儀する人
は救ひ、乞ふ者
には與へる。

彼は一氣にはひ
つて來た。……
そして亂暴らし
い顔は、一目見
てぞつとするば
かりである。

僧正はこれ聞きつゝ、テーブルに向つて坐つた。ちやうどその時である、外から誰かが戸を叩いたのは、僧正の口からは直ちに、「おはひりなさい」といふ返辭が出た。これは音なふ者のある毎に、誰彼の差別なく僧正の口から發せられる詞である。僧正の家には、秘密もなく、都合といふものもない。難儀する人は救ひ、乞ふ者には與へる。財産についても全く自分といふことを忘れて、我が住居を我が家とは思つてゐないのである。

返辭に應じて入口の戸は開かれた。見れば開いた人の顔に決死の心が現れてゐる。こゝで救はれなければ救はれる所がないからである。彼は一氣にはひつて來た。背には囊を負ひ、手には杖を持つてゐる。そしてその野卑な、大膽な、疲勞した、そして亂暴らしい顔は、一目見てぞつとするばかりである。

九銀の皿 その二

黒岩 涙香

この旅人こそ、全くその筋から銘を打たれた前科の大悪者であつた。眞に恐るべき人間であつた。

燈火の前に立つたその顔の凄さ、その姿の恐しさ。これを見て、老女も、僧正の妹も、逃げようとするが如く、我知らず立ち上つた。若し日頃僧正の感化を受けてゐなかつたら、二人とも必ず叫び聲を發したであらう。たゞ泰然として靜かなのは僧正である。僧正の靜かな態度に恥ぢて、妹はすぐさま席に復して僧正の顔を見つめた。老女は立つたまゝ、棒のやうになつてゐる。やがて僧正は來客に向つて、穩かにその顔を見つゝ、問はうとしたが、客は問はるゝを待たず、あわてたやうな高い調子で言つた。
「私はジャン・ブルジャンといふ者です。懲役人です。十九年の

たゞ泰然として靜かなのは僧正である。

リーグ
約四千八百メー
トル。



僧正 ジャジ・ジャジを てもなす

間ツローンの獄で懲役を勤め、四日前に牢から出されたばかりの者です。今日は朝から十二リーグ歩き、疲れ果ててこの土地に着いたけれども、飯を食ふ所も寝る所もありません。行く先でみんなに斷られ、仕方なしにこの家の外の石の上にて寝てゐると、教會から出て來た婦人が、この家の戸を叩いて見よと教へてくれました。それで叩いたので、泊めてくれますか、くれませんか。この家は宿屋ですか、何ですか。十九年間牢の中

そしてまたも失望するのが厭だから、まづ第一に自分の履歴をさらけ出したのである。

の旅で二十サンチム使つただけです。宿賃は拂ひますが、泊めてくれるのですか、くれないのですか。彼に取つて、この返辭が何よりも先に聞きたいのであつた。そしてまたも失望するのが厭だから、まづ第一に自分の履歴をさらけ出したのである。僧正は人を斷つたことがない。返辭もせずとも分つてゐる。僧正は直ちに老女に向つて例の通り靜かに、「さあ、皿を出しておくれ」と言つた。この者のために、もう膳立を命じたのである。彼に取つては實に意外であつた。彼はつか／＼と、更に燈火の近くに進んで言つた。

「お待ちなさい、お待ちなさい。今私の言つたことが分りましたか。私は懲役人ですよ。罪人ですよ。牢から出されたばかりですよ。」

僧正はこれには取りあはず、また老女に向つて、

彼女は唯々として次の室に去つた。

「新しい敷布を出して、寢床の用意もしておくれ。」と命じた。僧正の言付には、一言もなく従ふ老女である。彼女は唯々として次の室に去つた。僧正は始めてジャン・ブルジャンに向つた。

「さあ、あなた、こゝへ坐つておあがりなさい。ちやうど私どももこれから食事を始めるところですから、御一緒に頂きませう。何といふ丁寧な言葉であらう。しかもそれは、わざとらしくなく、自然である。ジャン・ブルジャンは、始めて泊めてくれることと合點した。けれども、あなたなどと言はれるのは、彼に取つて今まで覚えのないことである。泊ることの出來たのは、無論嬉しく感ずるけれども、この待遇が怪しい、合點が行かぬ、殆ど恐しい位だ。彼は暫くは、口もきけなかつた。何か言はうとしたけれども、吃つて語をなさないのである。」

何だか燈火が暗
いやうではない
かといつた。



るのを、日頃から一方ならず愉快に感じてゐる様子である。ジャン・ブルジャンは既に「あなたと呼ばれて、異様に心がとけてゐると

銀の燭の
ろうとする
らう。と言ひ足した。六枚を残らず出せ
といふ謎である。このやうに盛徳限り
なき高僧でも、子供のやうな稚氣がある。
尤も子供のやうな心だから、自然にその
徳が高くなるのであらうけれども、に
かく僧正は、この皿と燭臺とを客に見せ

その中に老女は銀の皿を出して来た。ジャン・ブルジャンは席に着いた。僧正は老女に向つて、「何だか燈火が暗いやうではないか。」と言つた。これは銀の燭臺を持つて

ころへ、更にかやうな取扱を受けたので、嬉しさ怪しさに、自分で自分が解らなくなつた。

「牧師さん。貴方は世間の人のやうに私を追ッ拂ひもせず、銀の皿や銀の燭臺まで出して、私をお取扱にして下さる。私はもう、何にも貴方には隠しませんよ。」

身の上話を始めようとするのであらう。僧正は遮るやうに、「なに、何にも話すには及びません。この家は私の家ではなく、私はこの家の主人ではないのですから。」

「えゝ？」

「この家は誰でも難儀をする人の泊る家です。行き暮れて惱む人が、この家の主人です。」

この言葉が若し心の底に浸りこまぬならば、それは人ではない、いや鬼ですらもあるまい。ジャン・ブルジャンは殆ど呆れた體で

この家は私の家
ではなく、私は
この家の主人で
はないのです。

この家は誰でも
難儀をする人の
泊る家です。行
き暮れて惱む人
が、この家の主
人です。

噫無情

ユーゴーの傑作
「レ・ミゼラブル」の日本譯に、
記者黒岩涙香が
名づけた題であ
る。

ある。僧正は更に語をついだ。

「あなたの名前も聞かぬうちから分つてゐます。」

「えゝ？ 聞かぬうちから？」

「はい、我々の同胞兄弟といふのです。」

あゝ、この者を同胞兄弟といふ。僧正の心は、神の心であつた。

(「噫無情」に據る。)

一〇 仕事の邪魔

檜葉ひばの生牆くねを刈つてゐたところへ、お客が見えた。

「何をしておいでですか？」

「生牆を刈つてゐました。」

「さうですか。お骨が折れますなあ。」

「……………」

生牆
生垣のこと。こ
れを東北地方の
方言でクネとい
ふ。

「さやうなら」と言つて、歸つて行つた。

苺いちじくをもいでゐるところへ、お客が見えた。

「何をやつておいでですか。」

「苺をもいでゐます。」

「綺麗ですねえ。毎日こんなに取れるんですか。お楽しみですねえ。」

「まあ縁側におかけなさい。」

ルビーの一塊を鹽で洗つて、砂糖をかけて振舞つた。

「さやうなら。どうも御馳走さま。」

千葉縣の習志野の近邊に院内といふ所がある。そこに昔、治右衛門といふ奇人が住んでゐた。

ルビーの一塊を
鹽で洗つて、砂
糖をかけて振舞
つた。

治右衛門が生牆を結つてゐる所へ、村の者が來て、

「治右衛門さん、治右衛門さん、何をしてござる。」

と尋ねた。治右衛門は

「井戸を掘つてゐるんだよ。」

と答へた。

「なんだ、井戸掘りだつて？ 生牆結ひをしていらつしやるんぢ

やありませんか。」

「そんなに知つてゐるなら、聞くに及ばないだらう。」

世の中に治右衛門は少い。村の者が多い。そして解りきつた事を繰返して、治右衛門が仕事の邪魔をする。

世の中に治右衛門は少い。村の者が多い。そして解りきつた事を繰返して、治右衛門が仕事の邪魔をする。

海老が言つた、海が餘り狭いから、おれは始終曲つてゐる。」

蟹が言つた、世間が思ふやうになるならば、おれは横に歩きはせ

ぬ。思ふやうにならぬのが世の中だ。」

海老にも蟹にも理想がある。そしてその理想の大いなるに對しては天地も狭いもののやうに思つてゐる。海老にも蟹にも短所がある。そしてその短所の醜い癖をば、世間が惡いたため仕方な

短所の醜い癖をば、世間が惡いたため仕方な事の妥協だと思つてゐる。

さの妥協だと思つてゐる。海老や蟹は取りも直さず、我々人間である。

〔野草集〕

一一 武藏坊 (川柳)

武藏坊とかく支度に手間がとれ

うたゝねの顔へ一冊屋根を葺き

かみなりをまねて腹掛やつとさせ

米つきに所を聞けば汗をふき

義貞の勢はあさりを踏みつぶし

風呂敷を解くとかけだす眞桑瓜
名物を食ふが無筆の旅日記
初物が來ると持佛がちんと鳴り



柳川 柳祖の井柳

本降になつて出て行く雨やどり
清盛の醫者は裸で脈をとり
寝てゐても團扇のうごく親心
道問へば一度にうごく田植笠
芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり
煮うりやの柱は馬に喰はれけり

柄井川柳

通稱八右衛門
名は正通 江戸
の人。寛政二年
(一五五〇)歿。年七
十三。

團扇のうごく親
心

芭蕉は飛び込み
道風は飛びあが
り。

文王

支那の上古時代
周の國の王。

能因

平安朝の歌僧
俗名橘永愷。

山本一清

天文学者
理学博士
滋賀縣の人
明治二十二年生

トレミー

西紀二世紀のア
レキサンドリア
の天文学者、數
學者、地理學者。

星座とは最寄の
星々を結びつけ
て、意味のある
形をなした一座
と見ることであ
る。

琴の星座。
鷺の星座。

泣くくもよい方を取る形見わけ
わらぢくひ迄は能因氣が附かず

〔詳風柳多留〕

一二 趣味の星座

山本 一 清(據)

星座の觀念ははやくバビロニヤ人の思ひついたもので、黄道十
二宮の區分の如きは、實に紀元前五千年にも遡る古いものである
が、ギリシヤ人がこれを補足し、完成して、紀元第二世紀には、トレミ
一の四十八座が悉く揃ふやうになつた。
星座とは最寄の星々を結びつけて、意味のある形をなした一座
と見ることである。この所屬の星々を都合よく結びつけては、そ
の名に因んだ趣味のある畫圖が、あの廣大な天空のあちこちに、一
つづつ描かれてゐると考へるのが、昔の天文学者の慣例であつた。
例へば、琴の星座は一面の七絃琴、鷺の星座は鷺が翼を擴げて飛ん

ヘルクレス星座。

星といふものは、昔も今も單なる物理學的光源とのみは見られないのが普通で、必ず一種の神祕的な、崇高な、或はロマンチックな感興を伴ふものである。

でゐる形、ヘルクレスは一人の英雄が右手に棍棒を持ち、左手に月桂樹の枝を持つて、片足跪いた姿といつたやうに、さういふ畫圖が大空に描かれてゐるものと、美しく考へてゐたのである。無論今日の純理學的な頭で見れば、かういふ想像は學術上の根據の全くないものであるが、天文といふものには、昔から理窟だけでは通らぬところがあつた。殊に星といふものには、昔も今も單なる物理學的光源とのみは見られないのが普通で、これを見るだけでも、必ず一種の神祕的な、崇高な、或はロマンチックな感興を伴ふものであるが、尙ほその上にこの星々の運行を知るやうになると、更に天界の整然たる秩序と雄大なる計畫とに打たれ、宇宙の根源に直接したやうな氣持になつて、それが或は神話となり、或は宗教と結びつき、段々一つ一つの星の並び方に對して不思議な想像が加へられるやうになつて、遂に人の姿や獸の形を表すと考へらるゝまで

カシオペア星座。

大熊星座。

牧羊者星座。

に發展したのであらう。人に感情生活の一面が存する限り、こゝまで來るのが自然で、星座の由來は實に意味の深いものである。天界に於ける春の夜の象徴として最も優れて立派なのは、カシオペアの美しい形が低く西北の地平線に隠れて、その代りに壯大な北斗七星が漸次に東から登つて來る姿である。北斗は支那の名で、西洋人はこれを大熊星座と言つてゐる。熊といへば、いかに大きな熊で、七星の中の四角形が腰部に當り、他の三星が尾となつてゐる。そしてその頭部は、遙か西の方の諸星まで達して、前肢、後肢も、それ相應に長く伸びてゐるのだから、全體としての熊の形は、ちよつと想像もつかぬばかり恐しく大きいものである。しかし長く見馴れると、これらの星の形が、いつか熊の有つ愛と親しみとを與へるやうになるのだから、面白い。大熊の後から彼を追ひつゝ、東に上つて來るのが牧羊者星座で

ある。この星座の中には赤みを帯びた一等星があつて、まづ誰の眼にも映ずる。この星はアルクツルスといつて、その強大な光輝を以て、昔から世界各国の人々の眼を惹いたものである。

獵犬星座。

ヘベリウス。

味なことを考へたもの。

牧羊者の西、大熊との間には、獵犬星座がかすかに光つてゐる。犬は二疋。これは今より二百餘年以前に、ドイツのヘベリウスの發見した星座で、犬は首繩を牧夫の手に握られたまゝ、西を向いて大熊に吠えかゝつてゐる姿であるが、天文學者も随分味なことを考へたものである。

獅子星座。

北斗と背中合はせに獅子星座がある。獅子の胸に王者の意味のレグルスと呼ぶ一等星が輝いてゐる。色は白くして、光に一種の威嚴がある。この星はちやうど黄道圈上に當つてゐるので、昔から諸國の天文家に重要視されたものである。ペルシャではこの星を「天の四つ柱」の一つに數へたと傳へられる。

夏の天は、遠く南から北に懸つた天の河の壯觀と、これを東西に挟んだ七夕の夫婦星めをとぼしとによつて、我々に最も親しみあるものとなつてゐる。天の河は世界各国の人々に對して、昔から一つの興味ある謎であつた。西洋人は多くこれを道路と見、東洋ではこれを河と見た。今の知識から見れば、いづれも當つてはゐないが、彼等が同じものを或は路と見、或は河と見たところに、それ／＼彼等の生活の一面を反映してゐて、深い興味がある。

生活の一面を反映する。
七夕物語。

牽牛織女の七夕物語は、我が國には長く親しまれて國民の情生活の最も味はひある一部を成してゐる。今更これを説明する必要はないが、この物語がどうしてかやうな形を備へたかを考へて見るのも一興であらう。天文學の方からいふと、ちやうど天空のあの邊り、殊に天の河の領分が、昔から新星の最も多く現れる所である。そしてその新星は、必ず白、黄、赤……と五色の光を點じつゝ、急

激に明滅するのであるが、かういふことを考へ合はせると、七夕の話は、單なる空想の産物ではなくして、或は、今を去る何十世紀かの大昔にでも現れた或新星の觀察と驚異とから生まれたものではなからうか。かう見ると、この話は意外な學問上の根據を有つてゐさうにも思はれる。

織女星の屬する星座「琴」の西に、三等星を頭としたヘルクレス星座がある。ふと見たところは極めて平凡な星座であるが、最近の研究によると、我が太陽系の落ち行く先きがほゞそのあたりであるといふので、特殊の興味を有たれてゐる。

ヘルクレスの南の邊りに接して蛇遣ひ星座がある。またこの「蛇遣ひ」の東と西とに同じく「蛇」と名づけられた星座がある。この「蛇」と「蛇遣ひ」とはもとくゝ一つの星座であつたので、この中の星を眺めるには、是非とも一人の壯漢が蜿蜒たる大蛇を兩手に捧げて、

ヘルクレス星座。

蛇遣ひ星座。
蛇星座。

一人の壯漢が蜿蜒たる大蛇を兩手に捧げて、天の一方を睥睨してゐる。

天の一方を睥睨してゐる姿を想像しなくてはならぬ。この星座全部が非常に廣い面積に互つてゐるので、この奇妙な想像圖を心に描きながら實際の星を見ると、今更天界の壯絶な景觀に驚かされざるを得ぬのである。

秋の空には、眼を喜ばせるやうな星の形が殆どないといつて好いが、冬の空は、地上が滿目蕭條の殺風景を呈するのに對して、すばらしい美しさを表す。かのオリオンを中心として、「大犬」「小犬」「雙子」「馭者」「牡牛」と、無数の美しい星が立ち並んだ様の立派さは、到底筆紙の盡くし得るところでない。秋天の淋しさに比べると、冬の空には早くも一陽の來復した趣がある。

オリオンは、その中央に三箇の二等星が一線に並列してゐる形から、謂はゆる「三つ星」として我々には、既に長年のなじみになつてゐる。オリオン星座には有名な大星雲がある。それは三つ星の

手に捧げて、天の一方を睥睨してゐる。

オリオン星座。

大犬星座

列から南の方へ僅か離れた星のあたりに、肉眼でもぼんやり見られるが、小さな望遠鏡で眺めると、また一段と面白い。
 オリオンの三つの星の一線に沿うて少しく南東に眼を移すと、そこに驚くべき光輝ある一星を發見する。これが大犬星座の首位を占むる巨星シリウスであつて、その光度は全天の恆星中の第一である。普通は一等星二十箇の一に數へられて居るけれども、事實は標準一等星の十三倍の光を發して、長年の間少しも衰へる氣色がないのである。

この星は支那では昔から狼星の名で通つたものであるが、エジプトの古代に於ても、またこの星が曉天に現れる頃からナイル河が氾濫するといふので、特別な宗教的儀禮の下に崇められた。エジプトの人々が割合に早くから、一年の長さが三百六十五日四分の一であることを知つてゐたのは、おもにこの「シリウス」の觀測に

據つたのだといひ傳へられてゐる。

(「星座の親しみ」に據る。)

一三空

高村光太郎

海にして太古の民の

驚きをわれふたたびす

大空のもとは

島木赤彦

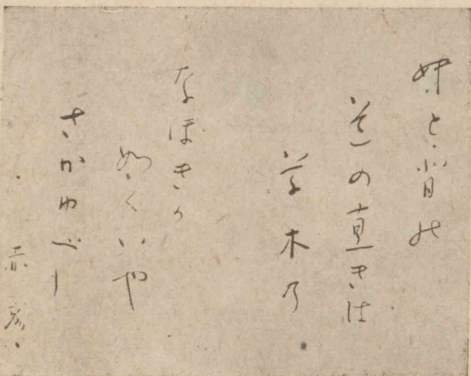
落葉松の萌黄の芽ぶき

煙りつつ陽は闌と

なりにけるかも

金子薫園

武藏野の風の夜に来て落葉の



島木赤彦筆蹟

高村光太郎

彫塑家、詩人

東京の人

明治十六年生

島木赤彦

歌人

本名久保田俊彦

長野縣の人

昭和二年(一九二七)

歿、年五十一

妹と昔の道の直

きは草木のなほ

きが如くいやさ

かゆべし 赤彦

金子薫園

歌人

名は雄太郎

東京の人

明治九年生

與謝野 寬

歌人、文學者
鐵幹と號す
京都の人
昭和十年歿
年六十三

さびしき音をききつくしけり

與謝野 寬

阿蘇の山けぶりわき立ちのどかにも

筑紫の空のしら雲となる

與謝野 晶子

磬梯の山をとどろと鳴らし來て

みづらみに入る白き横雨

尾上 柴舟

與謝野 晶子

歌人、文學者
故寬氏夫人
大阪府堺の人
明治十一年生

尾上 柴舟

歌人、國文學者
文學博士
東京女子高等師範學校教授
名は八郎
岡山縣の人
明治九年生

土屋 文明

歌人
法政大學教授
群馬縣の人
明治二十四年生

思へば今日はやすかりしかな

土屋 文明

つよき日は草野のうへにさしながら

野分に似たる風のふきゆく

古泉 千櫻

歌人
名は幾太郎
千葉縣の人
昭和二年(三五七)
歿、年四十二

古泉 千櫻

ふりすぐる夕立雲はいや暗く

鹿野のみ山をおほひけるかも

若山 牧水

若山 牧水

歌人
名は繁
宮崎縣の人
昭和三年(三五八)
歿、年四十四

雲ふたつ合はむとしてはまた遠く

わかれて消えぬ春の青空

窪田 空穂

窪田 空穂

歌人、國文學者
早稻田大學教授
名は通治
長野縣の人
明治十年生

星滿つる今宵の空のふかみどり

かさなる星に深さしられず

平福 百穂

平福 百穂

作家、歌人
名は貞藏
秋田縣の人
昭和八年歿
年六十一

ふるさとの山の起き伏し目にしめり

夕やけ雲のあかきひと時

伊藤左千夫

歌人
名は幸次郎
千葉縣の人
大正二年(三五三)
歿、年五十一

白波やいや遠白に天雲に

伊藤左千夫

末邊こもれり日もかすみつつ

長塚節

長塚節

歌人、小説家
茨城縣の人
大正四年(三五五)
歿、年三十七

みやこ草更紗染めたる草むしろ

しづかにぬれて霧雨ぞ降る

一四 パレスチナ紀行

徳富蘆花

徳富蘆花

小説家、文學者
名は健次郎
熊本縣の人
昭和二年(三五七)
歿、年六十

私は六月初、エルサレムから馬で三日の旅をしてナザレへ行つた。午後の日盛りには、大抵泉に近い大きな無花果の蔭に休んだが、それでもパレスチナ六月の暑氣は、腸加答兒後の私を非常に悩ました。皮膚に感ずる暑熱もだが、眼から脳に傳はる暑さは實に堪らぬ。山は白ツぽい石灰岩質の山、路は白ツぽい石路、木すら橄

見る／＼眼がち
らちらする頭
がくらく／＼して
来る。咽喉がい
らいらする水。
水、水が欲しい。

花 蘆 富 徳 (上)
(筆一精岡) 齋書の花蘆 (下)



機などは白ツぽい緑で、空は叩けばかん／＼と鳴りさうな、何の愛想の雲片くもがれだもない露骨な青天あぞら、土造の家の内は案外涼しいが、見る眼めにはたゞ白ツぽく光るだけ、要するに眼の向ふところ悉くこれ白熱地獄である。見る／＼眼がちら／＼する。頭がくらく／＼して来る。咽喉がいら／＼する。水、水、水が欲しい。が、その水が容易にない。ないと、益劇しく渴いて来る。飢渴と一口にいふが、飢は渴よりは餘程手ぬるい。餓死はまだ好い、渴死は死んでも浮かばれない。日本のやうな水に不自由せぬ國で

は、本當に水の有難味は分らぬ。聖書キリスト教に謂はゆる「活ける水」いのちの水「生命の水」の譬喩の眞味は、パレスチナのやうな所のちがひでなければ、眞劍には味はへない。理窟でも何でも、實際パレスチナでは水が即ち生命である。昔から命がけて井戸を争つたりしたのも無理がないのである。

私がパレスチナを旅した頃は、あちらの雨期が過ぎたばかりの時、泉は所々に滾々と湧いてゐた。泉の目標は茂つた緑である。緑の中には必ず泉が隠れてゐる。泉は大抵大きな圓石或は角石で馬蹄形に周圍を疊み、出口を一方に開いてある。そこへ、銀錢を瓔珞のやうに聯ねて、頸飾或は腕飾にした、色の淺黒い、眉の濃い、黒眼の凄い、險けな顔のシリヤ女が、昔リベカやサマリヤの婦をんながしたやうに、素焼の甕かめを頭にのせ、素足で水を汲みに來る。或は流れ口で洗濯をしたり、寄り集つて井戸端會議をやつてゐることもある。

泉は所々に滾々と湧いてゐた。泉の目標は茂つた緑である。緑の中には必ず泉が隠れてゐる。

井戸端會議をやつてゐる。

二里
約四キロ。



羊や驢馬や、杏アンズの荷を積んだエルサレム行の駱駝が、落水の溜ために頸さしのべてゐることもある。ドタンの泉が忘れられない。それはサマリヤの山路が、今二里餘り下ガラサリヤの平野に出ようといふ所で、昔ヨセフが父ヤコブの命により、十人への兄を探しに來て捉へられ、エジプトの人買こいに賣られた舊跡である。この日は朝の間に彼のヤコブの井に近いサマリヤのナブルス町を立つて、サマリヤの舊都セバステエを見て、シレトといふ村で晝食し、晝眠して、その後また馬に跨またがつたが、午後の暑さはまた格別で、た

やけに歌つてゐた。

緑も緑、染めたやうな水が滴りさうに嫩かで、しかも眼がさめるやうな緑の森であつた。

パレスチナの空氣は餘りに乾燥透明で、近く見えてもなかく遠い。

だ一吹の風もない。私は馬上に疲れ果てた。案内者も馬子も初はやけに歌つてゐたが、とう／＼黙つてしまつた。人間三人、馬三疋、煎りつけるやうな日の下をたゞ喘ぎに喘いで行く。三時をやや過ぐる頃でもあつたか、丘の角を一廻りすると、長い袋のやうな浅い谷が現れた。谷は爪先上りになつて、向うの低い丘の麓に盡きてゐる。眼をあげてまづ嬉しく見たのは、その丘の麓にほんの一簇だが、こんもりと茂つた緑の森であつた。緑も緑、染めたやうな水が滴りさうに嫩かで、しかも眼がさめるやうな緑の森であつた。その梢の間から修道院らしい建物が少し見えてゐる。この森を見たばかりで、私の沸つた頭が冷えて來た。私の乗つた白馬が足掻を速め出した。やがて胡瓜の畑なぞが見えて來た。百姓が水をかけてゐる。パレスチナの空氣は餘りに乾燥透明で、近く見えてもなかく、遠いが、それでもとう／＼その緑の森に來た。

無花果、桑、柘榴、杏、葡萄などの、廣い葉や、小さい葉が、澤々と潤つた緑を重ねて、あたりの白熱世界にたゞ一點の緑の島を作つてゐる。このやうに眼がさめるやうな緑の存在は、餘程潤澤の水の養ひに待たなければならぬ。果然數歩にしてその緑の源に來た。

一丈
約三メートル。

それは徑一丈もあるであらう。満々と水を湛へて溢れてゐる。と見れば、頭の中央を刺つた天主教の修道僧が二人、白い身體を泉に浸して首だけ出してゐるが、周圍の石に綱をかけてそれにぶら下つてゐるのを見れば、泉の深さが思はれる。泉の傍には僧衣が脱ぎ捨ててある。乗り捨てた二疋の驢馬が草を食つてゐる。私は旅僧が羨ましくなつた。私の馬は遠慮なく泉の溢れ口に熱い蹄を踏み入れ、長い頭を差しのべて、鼻を鳴らしながら長く／＼水を飲んだ。飲みながらずん／＼泉に寄つて行くので、裸僧が中か

四尺
一尺は約三十七
センチ。
甕を戴いた婦人
の影や、杖を持
つた牧者の影
や、羊や、牛や、
驢馬の影が、水
聲月光の中に、
薄墨の映畫のや
うに往つたり來
たりして。

らしつゝと叱つた。案内者はこの泉が即ちヨセフが兄達に打
込まれた穴の跡だといふ。そんな事はどうでもよいが、場所も好
し、水も多し、本當に好い泉だと思つた。旅僧等のやうに眞裸にな
つて飛び込まずに、このまゝ過ぎるのが残念だつた。今も堪へ難
く暑い日には、懐かしいこのドタンの泉が、一瞬間ミラージになつ
て私の眼前に現れる。それからその夜泊つたエニンの泉も好か
つた。エニンはサマリヤの山がガラリヤの平野に盡きる所で、疎
らに棕櫚の立つた村である。宿のすぐ前に泉が湧いてゐた。泉
を出ると、水は最早四尺ばかりの流になつて潺湲と音を立てて流
れた。宿の庭から見てゐると、甕を戴いた婦人の影や、杖を持つた
牧者の影や、羊や、牛や、驢馬の影が、水聲月光の中に、薄墨の映畫のや
うに往つたり來たりして、何ともいへぬ面白い夜であつた。

〔「新春」に據る〕

大正五年

島崎藤村

詩人、小説家
名は春樹
長野縣の人
明治五年生

一五 歸 朝

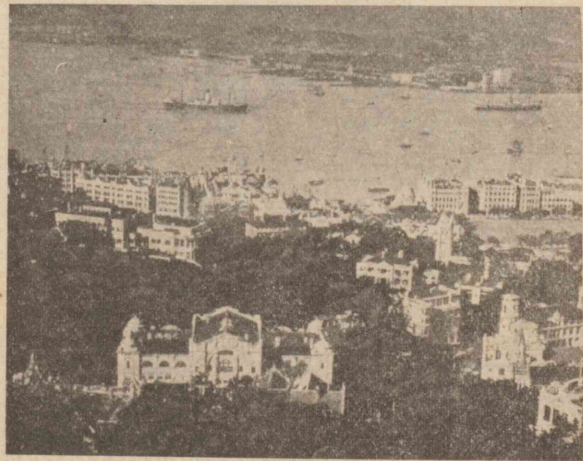
島 崎 藤 村

シンガポールまで歸れば、もう日本と同じやうなものだとは、熱
田丸の船員からよく聞かされたことだ。私はあのシンガポール
の港で、既に日本の下駄の音を聞いて來たし、あれからの船の中で、
日本の子供の泣き聲も聞いて來た。それにあの港からは護謨園
に従事する同胞の乗客とも一緒になつたから、暑い時の男や女の
素足の風俗をも久し振で見つて來た。シンガポールから香港、香港
から上海と、國の方へ近づくにつれて、日本的な色彩を見つけるこ
とが多くなつて來た。しかしそれは斷片的にである。

神戸に着いた時は、實にすべてが日本でないものはなかつた。
熱田丸の入港を知つて、上陸者を迎へようとする人達が、われらの
周圍に集つて來た。私はそれらの同胞に眼をそゞぎ、それらの人

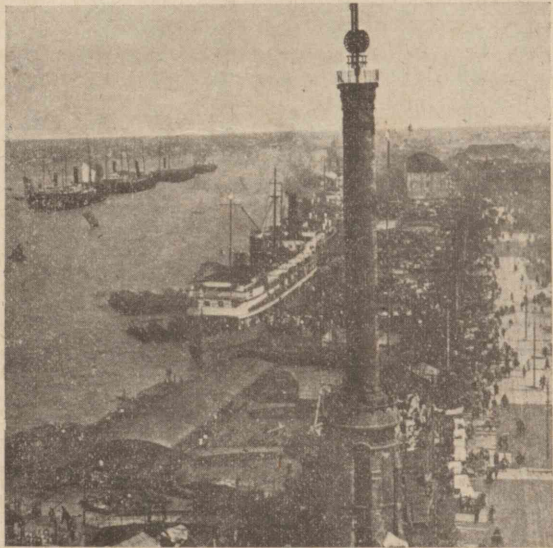
見ず知らずの人
にさへ御辭儀の
一つもして見た
いと思ふほどの
心地になつた。

達の間を歩いて見た。遠く旅して歸つて來た私が、どうかすると、見ず知らずの人にさへ御辭儀の一つもして見たいと思ふほどの心地になつたが、無理だらうか。七月初旬の日の光は私の行く先にあつた。その日本らしい日あたりを眺めるにつけても、いひあらはし難い強い歡喜が私の小さな胸に満ち來るのを覺えた。神戸の税關には、私は午前十一時頃までゐた。灰色なペンキ塗の木造の建築物がそれだ。夏の制服を着けた税關吏が、べたべたと澤山貼紙のしてある旅の鞆の上に、例の白墨で検査済の印を書いてくれた。さしあたりわれ



香 港

旅は私に巡禮者
のやうな心持を
與へた。



上 海 の 埠 頭

らのやうな上陸者に取つては、兩替店を探す必要があつた。英貨で持つて來た旅費の残りを日本の金に取替へるために。ポンドやシリリングを圓や錢にするために。われらの宿屋もさう遠くはなかつたし、町も見なかつたし、私は三人連で兩替かたど、清潔な街路の土を踏んで行つた。旅は私に巡禮者のやうな心持を與へた。疑もなく、これは廣い世界を遍歴して來た旅行者の誰しもが經驗するものに相違ない。その心は、自分の國の町を見るにも、恰も外國の町を見るやうな感じを懐かせるの

一種異様な感覺が、私の上に働き始めた。

街路の多くが土であるのもめづらしい。

である。私はこのやうな心持がいつまで自分に續くかを知らない。恐らく、五十五日間の海上で、眞黒に日に焼け、汐風に吹かれて來た私の皮膚も、色の褪める時があらうやうに、このやうな心持も次第に私から薄らいで行くのであらう。

とにかく一種異様な感覺が、神戸に上陸したその日から私の上に働き始めた。私は今が今この世に生まれて來たかのやうな新しさと鮮かさと初心らしさとを以て、半生の間見慣れた故國の事物々に對ふやうになつた。街路の多くが土であるのもめづらしい。歩道と車道との差別の少ないのもめづらしい。あそこの店頭に掲げてある紅や紫の旗は、こゝに出してある關西風の大きな提灯はと、そんな風に眼をとめて不思議に思ふやうになつた。その心持からいへば、下駄を穿いて通る人を見るさへ不思議に思はれた。男や女の素足の風俗は既に新嘉坡あたりから見ても來たも

のだが、それでも珍しい。

どうかすると、私はまだ海にゐるやうな氣がする。どこかの港へ上陸したに過ぎないやうな氣がする。自分の國ではないやうな氣がする。私の心は南アフリカのケープタウンへも行き、ダーバンへも行つた。あのマライ人や印度人や支那人などの歐洲人と群居する新嘉坡あたりの町へも行つた。時々私は自分の眼を疑つた。何故といふに、自分の前を歩いてゐる女が、それが實際日本の女ではなくて、マライ半島あたりの土人の女ではないかといふやうな氣を起させるのだから。

(海へ)

一六 歐米婦人に何を學ぶべきか

高良富子

歐米の婦人といつても、悉くが進歩した思想を有つた感心な人

高良富子

教育家、日本女子大學校教授
ドクトル・オウ・フィロソフィー
鹿兒島の人
明治二十九年生

ダーバン

英領南アフリカのナタル州の港市。

ばかりといふ譯ではありませんが、私どもが長い間あちらで交つてまゐりました方々の日常を申し上げて、お互日本婦人の向上の一助といたしたいと思ふのであります。

私どもが歐米の婦人から第一に學ぶべきことは、向うの婦人達が時間を自分の生命と同じやうに尊ぶ態度であります。時間がかゝつてもお金のかゝらない方がよいといふのは、向うの婦人達には、自分の命よりもお金を尊ぶといふことに聞えませう。假に日本婦人の外出に就いて考へると、髪を結び直す、念入りにお化粧をする、箆筒の前へ行つて着物を出す、あれにしようか、これにしようかと迷ふ、足袋を穿きかへる、下駄も他所行きのにする、といった具合で、出かけるまでに、少くともまづ三四十分から一時間はかゝります。

ところが歐米の婦人は大抵二三枚の外出着しか持ちませんか

仕事の能率

ら、多くは着たまゝで出かけます。この出かける支度に於ける時間の差が、まづ日本の婦人と歐米の婦人との仕事の能率の上に非常な相違を來たしますが、さて出かけた上で、汽車や電車に乗りますにも、歐米婦人の動作の敏捷なことは、とても私ども日本婦人の及ぶところではありません。

皮肉な申しやうですが、明治以前に生まれた老婦人は、一軒の訪問を大抵一日がかりでせられます。明治初代生まれの中老婦人は、一軒に約三時間を費されませう。私ども大正昭和に生を享けた今後の婦人は、是非とも三時間もあれば五六軒の訪問ができるやうにしたいものと思ひます。

最近日本でも、合理化能率化といふことが、よく産業上にも、家庭生活の上にも唱へられてまゐりました。この能率を挙げますにも、まづ第一に時間の考がはつきりしないやうでは到底駄目であ

第一に學ぶべきことは、時間を自分の生命と同じやうに尊ぶ態度。

訪問の準備に要する時間は、漸次に縮約されたが、まだく満足すべきでない。

合理化能率化

無駄のない緊張した生活

第二に學ぶべき

點は、生活に對して、豫め計畫を立てることである。

ります。

今日米國で有名な能率研究家なるギルブレス夫人の如きは、九人の子供を育てながら能率學校を經營し、家庭生活の能率をどうして高めるかについて着々と研究して居ります。子供たちも皆お母さんに倣つて、無駄のない緊張した生活を送つて居ります。時間を粗末にするだらしない暮し方は、父や母に取つての損失であるばかりでなく、大切な子供たちをだらしない人間にしてしまふ危険を含んで居ります。

歐米の婦人から學ぶべき第二の點は、毎日の生活、月々の生活、年の生活に對して、豫めきちんとした計畫を立てることであります。ギルブレス夫人は、朝起きて着物を着る、顔を洗ふ、食事の支度をする、といふやうな小さな事でも、前の晩の中に、ちやんと順序を立てて、翌朝早々手をつけるに都合のよいやうに準備をして置く

空疎。

自分で自分の運命を開拓して行く。

べきだ」と言はれましたが、始終この心がけを有つて居れば、一日一日がどんなに有効に使へるか知れません。計畫を立てることは半ば仕事をしたことになります。お互に計畫なしに過した一日、一月、或は一年は後から顧みますと、誠にお恥づかしい空疎なものであることが解ります。

歐米の婦人は、幼少の頃から他人にたよらず、自分で自分の運命を開拓して行くといふ習慣を有つて居りますから、主人や主婦は勿論、子供には子供の計畫があり、召使には召使の計畫があるのであります。それも目の前一日の計畫だけではなく、一月、一年、三年、五年と、遠い將來に互つての計畫があるのであります。そして彼等はこの計畫のために、前以て周到に準備をし、各自の分擔に従ひ、責任を以て着々と働きます。その結果、彼等の仕事に對する態度は自然に眞剣であり、誠實であり、また進んで何かと工夫をもし、研

他力本位。

學校生活に進歩
發達があるの
は、豫定の計畫
が立つてゐるか
らである。

究をも積むやうになります。
私ども日本の婦人のやり方は、今のところ残念ながらまだこゝまで進んで居りません。私どもの間では仕事をするにも、とかく分擔のはつきりしないのが普通で、その結果、誰かが何とかするだらうといふ氣持が勝つやうになり、結局他力本位の人頼みとなつてしまひます。

計畫のある暮し方をする者には、成長發展があります。學校へ出てゐる時分には、誰にも著しい進歩發達がありますが、これは一時間は一時間、一週間は一週間、一學期は一學期、一年は一年と、つぎつぎに豫定の計畫が立つてゐるからで、この學校期に見るやうな豫定の計畫による規則正しい生活が、他の場合にも、自發的に行はれるならば、人生到るところに進歩があり、光明があらませう。歐米の婦人が都鄙を問はず、概して日本婦人より進んでゐるのは、これによるのであると思ひます。

第三に學びたい
のは、名々の分
擔を明らかにし
て、他人の事に
立ち入らない點
である。

人の事に立ち入
るのは、人の足
を踏んだり、人
の家へ侵入した
りするのと同様、非常に失禮
なことである。

第四に學びたい
のは、協同一致
の習慣である。

それから第三に學びたいのは、歐米の婦人が、名々の分擔を明らかにして、決して他人の事に立ち入らない點であります。日本では、女が三人寄ると姦かしましいといふ文字通りの事があり勝ちですが、歐米の教養ある婦人は、絶対に他人の事には立ち入りません。たまたま他人の噂を持ち出す人があれば、人の蔭口はやめませう。と言つて、それをそらすのが普通であります。人の事に立ち入るのは、人の足を踏んだり、人の家へ侵入したりするのと同様、非常に失禮なことであるといふ、これが歐米の婦人達の心に、深く植ゑつけられた信念で、そしてそれは知識階級の婦人ばかりでなく、職業婦人にも、女工にも、召使にも通じて居る信念であります。

最後に歐米の婦人に學びたいのは協同一致の習慣であります。この點でも長く訓練されて居ります歐米の婦人には、日本の婦人

小異を捨てて協同。

社會的訓練。

に比べて一日の長があります。彼等には概して、少しの違に目かどを立て異を唱へて協同しないといふやうな小さな心がなく、大きな目的のためには進んで小異を捨てて協同いたします。やがて公民権も婦人に與へられようとして居り、町村の産業組合なども婦人の協同力によつて伸びようとする時にあたつて、日本婦人の協同心、團結力の弱いのは、誠に大きな缺點であり、また惜しむべき弱點であります。これは畢竟公を先にして私を後にするといふ社會的訓練が足りないところから來るので、日本婦人今後の向上的努力は専らこの點に注がるべきであります。

時間の尊重、計畫の豫定、仕事の分擔、小異を忘るゝ協同、以上述べました四點は確かに歐米婦人の長所で、私ども日本婦人の及ばぬところでもあります。私どもは日本婦人に特有の長所美點のあることをよく承知いたして居ります。またこの長所美點を長養し

最大の病弊に對する最適の藥餌。

西村眞次

人類學者、考古學者
文學博士
早稻田大學教授
三重縣の人
明治十二年生

て行くのが私どもの大切な務であるとは信じて居りますが、これと同時に歐米婦人の有つこれ等の長所を心廣く取入れて私どもの生活を一步步々引上げるやうに努力するのが、更に大切な努力であると思ひます。我が短を捨てること、他の長を探ること、これが進歩發達の原動力であります。廣く現代の世界を見渡して、我が國俗の最大の病弊に對する最適の藥餌ともいふべきこれ等の美風を取入れる努力を惜しむやうでは、日本の家庭はいつまで經つても、能率のない、進歩のない、研究のない、隨つて光明のない劣等な境域から脱出することが出來ないであります。

一七 日本帝國の萌芽

西村眞次

進化が人類を生んだ。彼等は向上することなしに彼等自身を見出だすことが出來なかつた。長い歲月の間に少くとも四種の

寰境

最善、最美、最眞の生活。

人種となつて東西南北に散つた人類は、地理的寰境に影響せられて、益、その特殊の性能と體格とを發達せしめた。そしてその間に彼等はそれ〴〵の境遇に應じて、出來得る限り最善、最美、最眞の生活を送らうと努めた。この三つの「至上」を求めて飽くことを知ら



穴居の下ヶ城縣本熊

なかつた彼等は、それらを手に入れんがために漂泊を試み、漂泊の後に漂泊をつゞけて、遂に世界の果から果まで、地帯の極みから極みにまで移動した。

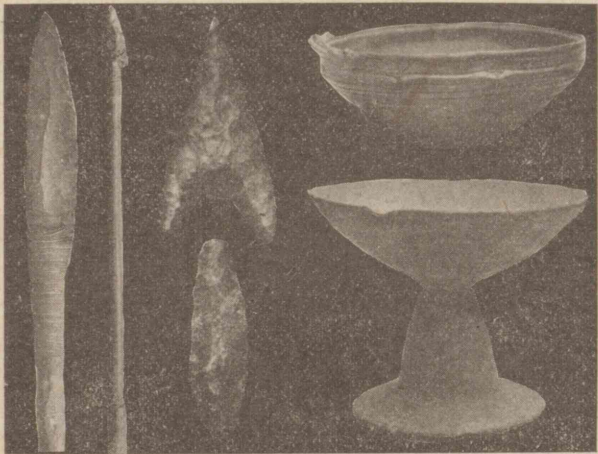
極めて古い時代は姑く措く。新

石器時代に彼等は、主として西と東とに動いた。それは、一面、西方渴仰、東方憧憬といふ二つの思念に引張られたため、他面、自然に壓迫せられて、苦しい生活を安易の生活に乗り換へるためであつた。

新石器時代

人類が主として石器を用ゐた時代。舊石器時代を承けた時代で、今日から約一萬年ばかり前。

かうして東方を憧憬する種々の民族が北から、南から、或は西から、野を越え、山を越え、海をも越えて、いづれも東の果にありといふ太陽の源泉をたづねて、日本群島に集つて來た。來て見るとそこには境界もなく、障礙もなく、妨害もなく、ただ自由と希望と歡喜とがあるばかりであつた。北の果から來た舊アイヌは、そこに會て知られなかつた安易の世界を見出だした。北西から來たツングースは、そこが理想の樂土であることを知つた。西南から來たインド支那族は、そこに樂しい美の別天地のあることを發見した。南から來たインド・ネジャ



ろいろいろの器土と器石

い美の別天地のあることを發見した。南から來たインド・ネジャ

族は、そこに満足の念に満たされた生活を營んだ。ネグリトーはそこに厚い唇を反らして夢みるやうな月日を送つてゐた。かくして彼等はいづれも、ありし日の要求を忘れたかのやうに、この群島に來てその漂泊を止めてしまつた。

○氣候がよく、景色がよく、物資が豊富で、人口の稀薄なアメリカ大陸が、今日でも猶ほ舊世界の人々に現世の樂園ともいふべき移住地と思はれてゐるやうに、それらの日にこの日本群島は、四方から漂泊して來た民族に取つて、一種の樂園であり天國であつた。この群島が北方、南方、西方のあらゆる民族を牽きつけ、彼等をして満足してそこに定住せしめ、また他の地方に移つてゆくまいと決心させるには、そこにいくつかの力強い因由があつたに相違ない。氣候の中和はその有力な一因由であつた。暑くもなく寒くもない群島の氣温は、どんなに北方民衆の凍つた血を溶かして、酷寒

日本群島は、四方から漂泊して來た民族に取つて、一種の樂園であつた。

氣候の中和はその有力な一因由。

萎縮

弛緩

氣候は生活の第一條件であつた。經濟が生活を左右しなかつた自然民族に取つて、好惡適否の感を起させるものは、主として氣候であつた。

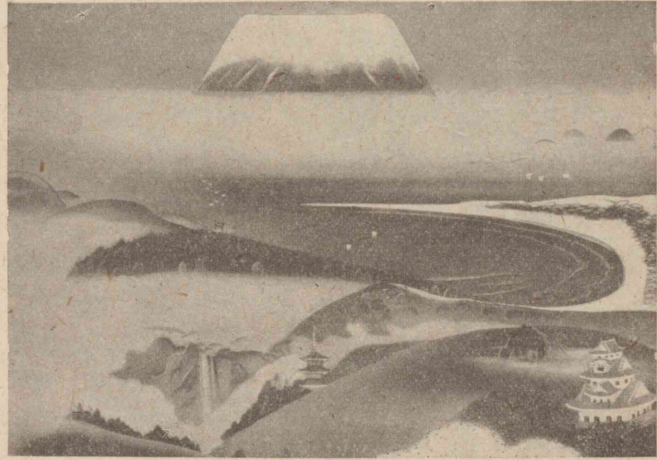
景觀の美もまた一つの大きな牽引力であつた。

の脅威に萎縮した身體をのんびりさしたことであらう。どんなに南方民族の溶けた肉を引きしめて、極熱の壓力に弛緩した運動神經に活氣を興へたことであらう。雨量が多く、隨つて水蒸氣が多くして、空氣の濕潤した、その癖、明るい、麗かな群島の雰圍氣は、どんなに西方民族の鬱血した頭腦を刺戟して、變化の少い寰境に馴致された習俗を打破せしめたであらう。氣候は生活の第一條件であつた。經濟が生活を左右しなかつた自然民族に取つて、好惡適否の感を起させるものは、主として氣候であつた。彼等がこの氣候の中和した群島から居を移さうとしなかつたのは無理ならぬことである。

○景觀の美もまた彼等に取つて一つの大きな牽引力であつたに相違ない。自然の美は所詮形式の美に過ぎない、そして形式の美は、空間と時間との面白い按排に過ぎなかつた。山は木で蔽はれ、

醇化

霞と紛ひ、霧に映えて。



日本映画の影の部 (小早川秋聲筆)

野は草で蔽はれて、見る限り青々とした群島の夏は、どんなに北方民衆の眼を娛しましめたであらう。野も、山も、森も、谷も悉く雪に閉ざれて、目路の限り白色に醇化された群島の冬は、どんなに南方民衆の心を驚かしたであらう。春の花の紅、秋の葉の黄は、霞と紛ひ、霧に映えて、どんなに西方民衆を牽きつけたであらう。雄大な浪の音、可憐な鳥の聲、蝶の翅の美しい文様、鳥の柔毛の興味ある色彩、それらは原始民族の耳に眼に、どんなに美しく感ぜられたであらう。森の神秘、山の莊嚴、河の清澄、海の雄渾、それらはどんな

永劫の光輝。

新鮮な生命の氣息。

にこの群島に移住した人々の若い心を動かしたであらう。地には強烈の香氣を漂はせる花がないけれども、空には永劫の光輝を放つ星がきらめいてゐた。雨期には黒雲が天を蔽うて、地は流されるかとはばかりに雨が降るけれども、一たび霽れ渡ると空氣は忽ち舊の明澄に歸つて、そこに新鮮な生命の氣息が呼吸された。颱風期には東から、南から、大地をゆるがす暴風が襲つて来て、樹を抜き、家を破り、人畜を倒すけれども、一たび凪げばそこには靜かな天地が開けて、平和の空氣が四邊に充つるのを覺えたか



日本映画の影の部 (小早川秋聲筆)

うした自然の美しさは、北から南から西からこの群島に集つて来た人々の心を安め、慰め、落ちつかせて、そこを去らうとする氣を起させなかつたのみならず、永久にそこに住みたいといふ心を起させた。そこは彼等に取つて何物にも替へられぬ美の殿堂であり、愛の境域であつた。

物資の供給の豊富であつたことも、また確かにこの群島が四來の民族を牽きつける大きな力であつた。山林には無限の材木があり、谿谷には多量の石材があつた。薬に用ゐる草、繩に綯ふ蔓、織物にされる植物、花や葉や實や根の食物になる草木は、どこにでも見出だされた。山林には鳥が啼き、獸が群り、彼等の矢や石棒の的となつて、食物、衣服の料を多量に供給した。海に行き、入江に行き、河に行き、湖沼に行くと、そこには無数の魚類が棲息して居り、また取盡されないほどの介類があつた。かくして四來の移住民族は、衣

物資供給の豊富も、四來の民族を牽きつける大きな力であつた。

その足の裏はもはや美しい群島の地にへばりついてゐた。

豫見の力を殆ど有たぬ自然民族。

食住の三つの要求を容易に充たし得て、他に移住する必要を感じなかつた。そして狩獵時代が過ぎて農業時代の曙を迎へた時には、彼等は既に愛着の心を起して、その足の裏はもはや美しい群島の地にへばりついてゐた。

これらの三つを主因とし、それにいくつかの従因が絡まつて、群島に移住した人々はもはやそこを自分たちの植民地とは思はなくなつた。二世代、三世代と經つ中には、そこを全く自分たちの故郷と思つてしまつた。自分もそこで生まれた。親達もそこで生まれた。祖父母もそこで生まれた。祖父母の親たちはどこで生まれたか知れないけれども、さういふ事は回顧の力の薄い、想像力の弱い、豫見の力を殆ど全く有たぬ自然民族に取つては、最初から大した問題ではなかつた。かくして移住民族は全くそれらの故郷を忘れて、この群島を自分の國と思ひ、自分の一族が發祥の地

とも思ふやうになつた。
我々の遠き祖先がこの國土に結びつけられた事情は、かうである。
〔國民の日本史、大和時代〕

川村多實二
理學者
京都帝國大學教授

一八 日本の眞珠

川村多實二(據)

岡山縣の人

古事記

和文で書かれた我が國最古の歴史。開闢から第三十三代推古天皇(二六八年崩御)の御代に互つてゐる。傳説歌謠多く、第四十三代元明天皇の和銅五年(七三三)太安萬侶が稗田阿禮の口誦するところを筆記して天皇に上つた。

我が國の眞珠が世界的に知られたのは極めて最近のことであるが、國內に於ては遠い太古から特別に貴ばれて、種々の裝飾に用ゐられた。眞珠の事の始めて我が文書に現れたのは『古事記』の神代の卷であらう。神武天皇の御祖父君彥火々出見尊の(妃)となられた豊玉媛が、尊に別れて父なる海神の宮に歸られて後、尊に寄せられた歌に、

赤珠は緒さへ光れど白珠の

君がよそひし貴くありけり

景行天皇
第十二代。(御在位三七一—三七九)

神功皇后

第十四代仲哀天皇の皇后。(御攝政六—一九)

豊浦

長門國豊浦郡

允恭天皇

第十九代。(御在位二〇三—二二二)

日本紀

三十卷。六國史の第一。漢文で書かれた我が國最古の歴史で、神代から第四十一代持統天皇の時代に互つてゐる。

といふのがあつた。赤珠にも比ぶべき我が生みの子の赤子よりも眞珠の裝飾を帯びた君の御姿の方が貴いといつて、(夫)の君なる尊を思はれたのである。神代の貴人が眞珠を(愛)でて、身邊の裝飾に用ゐたことは、これでも明らかである。

その後、人皇の世となつては、景行天皇が肥前の國で見事な白珠を獲られたことがあり、また神功皇后が豊浦の津で如意珠を獲られたことがある。白珠も如意珠も共に今の世の眞珠のことであるが、殊に面白いのは允恭天皇の御宇に、明石の浦で大鯰の腹の中から大きな眞珠を得たといふ『日本紀』の物語である。それは、天皇が御即位の十四年に、淡路に御狩を催された時であつた。麋鹿猿猪が山谷に充ち群つて居りながら、一匹の獸も獲られないので、怪しんで狩をやめて、占にかけられると、それは島の神の(祟)で、明石の海底に世にも珍しい眞珠がある、それを取つて我が祠に納めて下

剛膽な手練者。

堅唾を呑んで。

さらば、山野の獸を悉く奉らうといふのであつた。そこで、所々の海人どもを呼び集めて、明石の海底を探らせられたが、海が深いので底まで潜り入る者が無い。ところが、その中にたゞ一人、男狭磯といふ剛膽な手練者の海人があつて、腰に繩をつけて、勇んで海底に飛び入つたが、暫くすると浮かみ出て来て、海底に一つの巨大な鰻がゐる、その周囲がまばゆく光り輝いてゐると言つた。「島の神が所望の玉は必ずその鰻の腹中に在るのであらう、もう一度潜つて御奉公をせよ」と激励して、また潜らせたが、皆が繩を凝視めつゝ、堅唾を呑んで待つてゐると、暫くして合圖があつた。それッといふまゝに、繩を手繰ると、男狭磯は大鰻を抱きかゝへて水面に浮かみ出たが、浮かむと同時に息が絶えて、空しき亡骸を浪の上に漂はした。やがて鰻の腹を割いて見ると、果して桃の實位の大眞珠がその腹の中にあつたので、これを島の神の祠に納めて、再び狩を

すると、夥しい獲物があつたといふのである。

萬葉集にも、當時の人が眞珠を珍重した事を知るべき歌が澤山載せてある。例へば、

海神のもたる白玉見まくほり

千たびぞ告りしかづきする海人

海神の手にまきもたる玉ゆゑに

いその浦わにかづきするかも

海底しづく白玉風吹きて

海は荒るとも取らずばやまじ

等がそれで、これらの歌や傳説によつても、眞珠が神代以來いかにかり我が國人に貴ばれ、神に愛でられ、随つて海人等によつて命懸けの冒険が試みられたかが知られる。

本來眞珠は、貝類の肉の中に偶然形成される球形の物體である

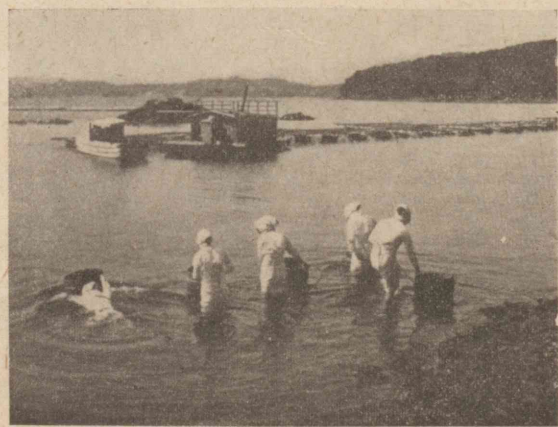
萬葉集

二十卷。我が國最古の歌集で、第十六代仁德天皇から第四十七代淳仁天皇に至る四百四十六年間(元皇一四二九)に互り、歌の數四千四百九十六首。

嗜食。

介殼を開いては、しばく、燦然たる光の眼を射るのに驚いた。

が、我が沿海に豊かに産するあまひ鰯や、阿古屋貝や、または到る所の沼や河に棲む諸種の鳥貝が、最良質の眞珠を産するので、水邊に居を構へて貝類を嗜食した古代原始の住民は、肉を食はうとして、介殼を開いては、しばく、燦然たる光の眼を射るのに驚いたことであらう。そしてそれが度重なる中に、遂にこれを名譽の裝飾に用ゐるやうになつたのであらう。



眞珠の栽培場と海女

眞珠が早くから愛で用ゐられたもう一つの理由は、他の寶石は、種々の人工を加へて琢いたり削つたりするまでは、謂はゆる璞玉で、殆ど美しい輝きを見せないが、眞珠だけは天然のまゝで、殆ど加工の

璞玉。

記一紀

餘地がない程に完全してゐるためであらう。美しいこの玉が、貝殻の破片や鹿の角などを除き、他のいづれの寶玉よりも遙かに古く用ゐられたことは、全世界に通じての事實で、これは現今南洋や濠洲に住む最未開の種族の風俗や、米國中部あたりの古代人類の墓や塚から發掘さるゝ出土品が、悉く證據立ててゐる處である。

『古事記』『日本紀』または『萬葉集』などを見ると、眞珠が極めて古く「シラタマ」と呼ばれたことが解る。「マタマ」といふのは、漢語の眞珠から來たので、一段後れて用ゐられた稱呼であるが、後には、いつの間にか「シラタマ」「マタマ」の倭讀みが廢れて、漢音の「シンジュ」が通稱の普通名詞となつたのである。

眞珠は人體の裝飾に用ゐられたのみならず、また早くから佛像の裝飾にも用ゐられた。奈良の三月堂の本尊たる不空縹索觀音の白毫及び寶冠には、鰯、阿古屋、二種の眞珠が豊富に用ゐられてあ

三月堂

奈良東大寺にある。法華堂、縹索堂ともいふ。

不空縹索觀音密教六觀音の一。

東大寺
奈良七大寺の
一。華嚴宗の總
本山。

元興寺
同じく七大寺の
一。華嚴宗。

る。また用途は違ふが、東大寺や元興寺の建立に際して、地鎮のた
め他の寶玉と共に眞珠を埋めたことも、最近になつて明らかにさ
れた事實である。

奈良朝以後の文書にもしばしば、志摩や對馬の眞珠の賣買され
たことが記されてゐる。西行法師は、三河國の伊良子に旅した時
に、贗貝といつて食料にも用ゐられる眞珠貝の殻が堆く積まれた
のを見て、

阿古屋とるいがひのからをつみおきて

寶のあとを見するなりけり

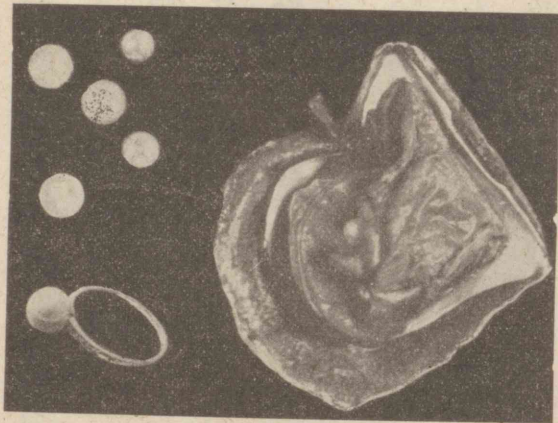
と詠んでゐるが、これは當時の常識がたま／＼歌人の詠に現れ出
てたのであらう。

日本の眞珠に關する西洋人の古記録は餘り多く知られてゐな
いが、最も古いのは、元の代に支那に來て政治の最高顧問となつて

マルコ・ポロ
(1256—1323)

タゼルニール
(1605—1639)

ケムフェル
(1651—1716)
ドイツの醫者、
旅行家。



眞珠と眞珠

ゐたイタリヤのマルコ・ポロが、その著『チバングの島』の中に、「この島
には薔薇色の大きな眞珠が澤山あつて、死人を火葬する時は、その
口中に一箇づつを含ましめる習慣が
ある」と書いてゐるのであらう。次に
は千六百七十年頃、印度に來てゐたフ
ランスの旅行家タゼルニールが、日本
の眞珠に關する噂の聽書をしてゐる
のと、千七百二十七年に出版されたケ
ムフェルの著述の中に、我が國で眞珠
を生ずる各種の貝類とその産地とを
報告してゐるのと位のものであるが、
但し後の二人は、日本の眞珠の特に優秀なる事と産額の豊富なる
事を知らなかつたやうである。それ故、日本の眞珠を實際歐洲人

に紹介したのは、彼等よりは寧ろ徳川時代に於ける九州各地の大
 名等であつた。彼等がローマ法王に使節を送る時に、土産とした
 贈物のうちには、立派な眞珠が澤山あつたといふことで、それはヴ
 チカン宮なる博物館所藏の文書に立派に明記されてゐる。殊に
 肥前の大村藩主の如きは、親しく法王及びその從者に一握づつの
 眞珠を贈つて彼等を驚かしたといふことであるが、大村灣は今も
 猶ほ我が國有數の眞珠産地である。

我が國の上代には、珠玉を緒に貫ぬいて頸飾にする風俗があつ
 た。また後には支那の衣冠を眞似て制定した服裝の所々に寶玉
 を用ゐたので、眞珠の用途も頗る廣かつたが、中世以後は服裝の推
 移のために、身邊に珠玉を帯びる風が次第に廢つて來た。但し一
 方商品として市場に於て多量に取引されたことを考へると、日本
 の眞珠が我が貿易業者若しくは支那、朝鮮、オランダ等の商人の手

で、盛んに海外に送り出されたことが想像されるが、それにも拘ら
 ず歐洲人が日本の眞珠に關する知識を更に有たなかつたのを見
 ると、日本の眞珠が商人の手から手に轉賣されて歐洲に達する頃
 には、インド、ペルシヤ、或は南洋諸島の産とすつかり混同されて、
 た「東洋眞珠」の名の下に、ひとしなみに取扱はれたのであらう。
 とにかく、量に於て豊かに、質に於て優れ、そして早くから特別に
 珍重されたこの國産の寶玉が、最近になつて世界冠絶の名を得た
 のは、我が國の近世に關する他の類似の事實と相伴なつて、頗る愉
 快な意味の深いことである。

一九 夏日小品

團扇

岡本かの子

團扇の贈物に就いて考へて見ると、をかしい。空氣は先方のど

岡本かの子
 歌人
 畫家岡本一平氏
 夫人
 神奈川縣の人
 明治二十二年
 生

この家にもあるのである。たゞそれを攪き立てる器械を差上げるのである。

けれどもやはり團扇は涼しい。贈主の好意は涼しい。

鮎

今こそ鮎を喰べたといふ、到達した感じを得たことがない。

いくら喰べても、鮎といふものを喰べた気がしない。今こそ鮎を喰べたといふ、到達した感じを得たことがない。

わたくしは鮎を喰べながら、いつも儂く^{はかま}もどかしく思ふ。それ程鮎のなかには捉へ難い鮎の味が秘められてゐる。

で、一度はあきらめながら、いつかまたやはり鮎といふものを喰べようとしてゐる。

蟻

胡麻粒を三つ繫いだやうな蟻。

胡麻粒を三つ繫いだやうな蟻が、座敷へ上つて来て探検を始めた。彼は疊の上の平野をあさり盡くして、一つの小山へ行き當つ



(筆 畝 秀 上 池)

魚 金

全身の智慧を觸角に集めて。

た。蟻は全身の智慧を觸角に集めて、今考へてゐる――

「蟻よ。それは私の足袋である。」

アイスクリーム

アイスクリームの一匙を子供の舌の上へ落してやると、子供は叫んだ。

「オ、熱い！」

そして子供は悦んだ。

浴衣

浴衣は自分が着るより、傍に懸けて眺めてゐる方が涼しい。一番いゝのは、自分の體が二つあつて、わたしのAが浴衣を着てゐるとき、わたしのBがそれを眺めて涼むことなのだ――

金魚

金魚に於ては、泳ぐことが取りも直さず身體に嬌姿をつくるこ

それは誰かが水中でめりんすの小旗を振つてゐるのである。

となのである。それゆゑ金魚の嬌姿は厭味がない。金魚の泳ぐのを見詰めてみると、段々魚といふ感じがなくなつて行く。それは誰かが水中でめりんすの小旗を振つてゐるのである。

振つてゐるのは誰か？

振つてゐるのはやはり金魚である。

噴水

ありのすさび水の髭。

それは大地がありのすさびに空中に向つて生やした水の髭である。人間の哀愁や鬱悶をしばし忘れさせようための自然のおどけである。

人間はそれを見てゐる時に、まことに心慰められる。見た後は、前より一しほの寂しさを増す。

中西悟堂

詩人

石川縣の人

明治二十八年生

二〇 快活な朝食

中西悟堂

—友ら集ひ來りてわが朝食の卓をかこめり—

室は

ひろびろとした緑の野に向つて

明るい心のやうにあけ放たれる。

清淨な朝の空氣と

かがやく朝の日光が

競ふやうに、室内に踊り入り、溢れる、

その室で

私たちは質素な朝食の卓にあつまる。

愉樂の泉のやうに

競ふやうに、室内に踊り入り、溢れる。

愉樂の泉。

清新な、健康な
食欲。

縁えりに近く食卓は置かれる。
さつぱりした卓子の食器、
そして食物。

朝風呂から出て来た私たちは、
清新な、健康な食欲にそそられて
親しい食卓をかこむ。

ちらちらと

卓上にうつる緑の樹の影、
野の面を吹いて流れ入る朝風、
ああひろがる緑野を眺めながら、
林や、田や、遠い森を眺めながら、
私たちは愉悅に溢れ、親愛に溢れて、

活潑に箸をはこぶ。

私たち、健康な若者らの心は
誰も彼も

旺盛な食事。

朝のやうに清潔に澄む、
日光のやうに快活にをどる。
そしてざわめきながら、
會話しながら、
美しい友情の集ひを讚め合ひながら
旺盛な食事をする。

庭の面に笑ふ花の姿、
眼の前の林にあつまる小鳥らの姿、

あゝ、淨らかな野の中で
 私たちの食事は祝され、幸される。
 なつかしい青空は、
 深く、けだかく、そして直接に
 私たちの食卓にうつり、
 生命の炎のやうに、
 私たちは若さを發散し合ひながら
 親愛な朝の箸をはこび、はこぶ。

渡邊十千郎

理學博士

東北帝國大學教

授

本名は萬次郎

これによつて風景は一層の美を添へ、これによつて社寺は參詣の衆を加へたり。

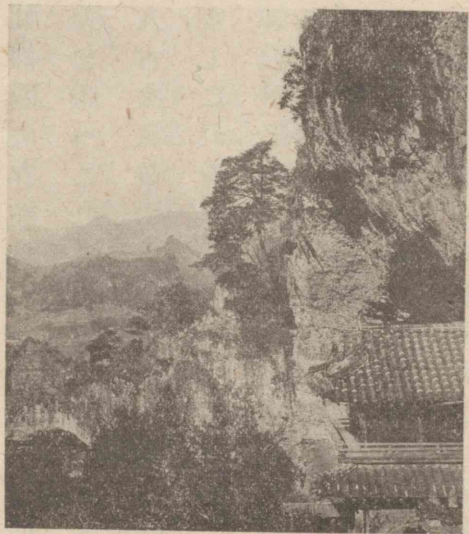
二一 風景と建築

渡邊 十千郎

本邦風景の一大特色は、山川草木の美はしきところ、殆ど常に神社佛閣の存在を見るにあり。而してこれによつて風景は一層の美を添へ、これによつて社寺は參詣の衆を加へたり。これ蓋し、邦人古來風景の美を讚美するの念に篤く、これを以て神意の表現となし、これを崇めて神靈の一部と見做したると、趣味に富める名僧知識が、形勝の地に佛閣を設け、神社を配して、以て一層信仰の念を高めしめむと努めたるがためならむ。

まづ試みに謂はゆる日本の名勝に於ける神社佛閣を數へむか。三景には、松島に瑞巖寺、五大堂、鹽釜神社あり、巖島に巖島神社あり、天の橋立に橋立明神及び文殊閣あり。その他富士の淺間神社、筑波の筑波神社、日光の東照宮及び中宮祠、妙義の妙義神社等、數ふる

に違あらず。谿の美しきところには、耶馬溪に羅漢寺あり、寢覺の床に臨川寺あり、昇仙峽に金櫻神社あり。湖沼の美しきところには、箱根の蘆の湖畔に箱根權現あり、琵琶湖に石山寺及び長明寺あり。榛名湖に榛名神社あり、赤城の大沼に赤城神社あり。海岸景勝の地には、紀伊の和歌の浦に東照宮と紀三井寺あり、北條灣に那古船形の兩觀音あり、金華山に黃金山神社あり。櫻の名所には、吉野に吉水神社、金峯神社、如意輪堂あり、嵐山に天龍寺あり。その他一々數ふべからず。かくの如く、多數の神社佛閣あるが中に、社殿の風景に影響する



寺 漢 羅 溪 馬 耶

こと最も大いに、殆どこれに由りて景を成すともいふべきは、まづ安藝の嚴島、奈良の春日山、京都の東山一帶等にして、琵琶湖畔の石山寺、北條灣頭の船形觀音、和歌の浦東側の紀三井寺等、また最尤者の一たるに恥ぢず。

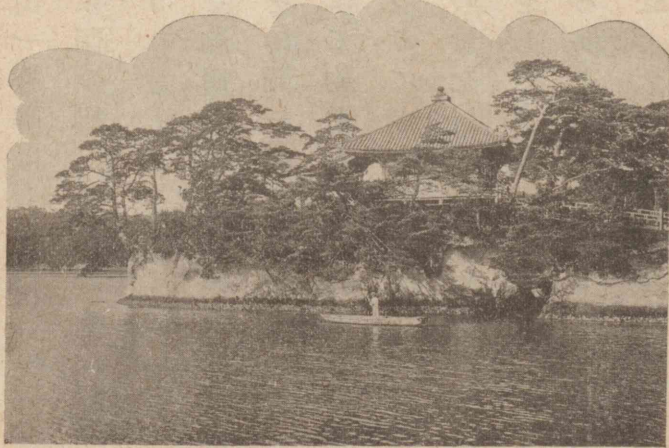
一里
約四キロ。
一丁
約百九メートル。
老松の翠濃かに、紅葉點綴の美を以て鳴る紅葉谷、白砂青松の景を以て優れたる松の浦。

嚴島は廣島灣の西北部に位し、長さ約四里、幅一里餘、安藝西部の海岸に平行して、西南東北に延長し、その間一條の水路を夾む。これ即ち大野の瀬戸にて、その中央部にて約七八丁、南北兩端に於て二十丁に過ぎず。全島花崗岩より成りて、老松の翠濃かに、紅葉點綴の美を以て鳴る紅葉谷、白砂青松の景を以て優れたる松の浦等、見るべき景觀少からずと雖も、本島をして日本三景の一たらしむるは、その西北岸大野の瀬戸に臨める海上に造營せられたる嚴島神社の殿堂、廻廊、華表、燈籠等の配置、よく天然の美と調和して、他に見る可からざる景觀を生じたるがためなり。神社は後に山を負

清波を湛へ。

一間
約百八十二センチ

ひ、前に鏡の如き清波を湛へ、寶物殿、拜殿、祓殿等、その基礎悉く水上にあり。これを廻つて廻廊長さ百四十八間、一間毎に燈籠を設け、百燈長く連なりて波上に映照す。しかして有名なる大華表は、更に前方七十間の水上にありて、潮満つれば參詣の船、帆を張つて潜るべく、清波溶漾、廻廊殿堂悉く水上に浮かび、江水樓閣相掩映して、妙趣殆ど類を知らず。これ本島が日本三景の中に選ばれし所以にして、その風景は一に江山自然の形勢を利用して造營したる人工的裝飾美に過ぎずと雖も、その點に於ては寧ろ極致とも



堂 大 五 島 松

江水樓閣相掩映して。

稱すべし。

同じく日本三景の中にも、松島の美は殆ど純然たる天然美なり。しかも猶ほ松島海岸瑞巖寺の門前に立つて灣頭を眺むれば、左に一島の鐘樓を戴き、雙橋を架して陸に接したるあり、その景觀を添ふること幾何なるかを知らず。これ即ち五大堂なり。更に右には數丁の彼方、雄島を連ぬるに渡月橋を以てし、灣上浮かぶるに白帆を以てす。而してこれ皆人工による裝飾美なり。

奈良の東郊春日山一帶の風景もまた老松櫻樹に配するに堂塔伽藍を以てしたる美にして、

奈良七重七堂伽藍八重櫻

大寺

法

と稱へられしほど、神社佛閣に富み、石燈、廻廊、廟宇の配置よろしきを得、且つその古色掬すべし。

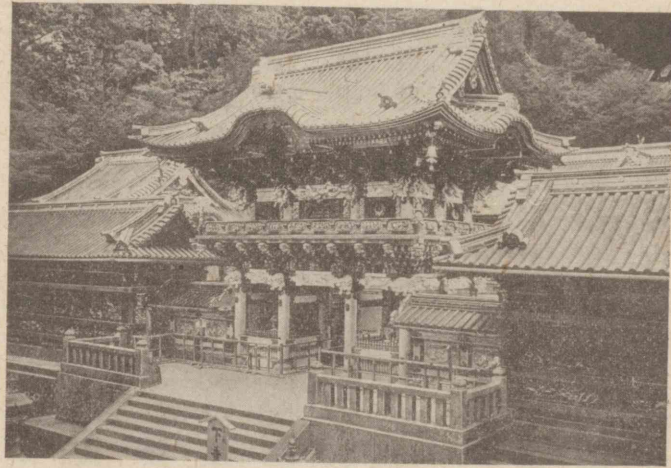
奈良の春日山に似たる樹木鬱蒼の美中に殿堂の華麗を連ねて、

老松櫻樹に配するに堂塔伽藍を以てしたる。

奈良七重
芭蕉の句。

采畫の妙、鏤刻の精、建築の壯、實に海内無雙なり。

樓閣の丹青翠微を挺んで、五層の磴道波瀾に俯し。



東照宮陽明門

安房の船形観音は、その眺望の大に於て類稀なるのみならず、懸

の妙、鏤刻の精、建築の壯、實に海内無雙なり。されど一切の壯觀悉く老杉の翠に蔽ひ盡くされて、景觀の大局に影響すること比較的少し。同じく鬱蒼の美中に在りても、和歌の浦の東側に位する紀三井寺は、樓閣の丹青翠微を挺んで、五層の磴道波瀾に俯し、浦の全景を一望の間に收めて、遙かに淡路島の連山を望む。その景觀の大、風光の美、正に南海第一と稱すべし。

伊豆の大島を遠く蒼海の彼方に望む。

崖を負ひて山腹に位し、その景觀の中心をなす。磴を登つて南に向へば、鏡が浦の眺望宛ら繪の如く、左に北條館山一帯の海岸を顧み、灣上の二島、鷹の島及び沖の島の宛ら青螺の如きを下瞰しつゝ、右には伊豆の大島を遠く蒼海の彼方に望むべく、その風光の佳麗なること、房總第一と稱すべし。

橋梁もまた屢、風景の裝飾美中の主なる要素をなすものにして、就中古來有名なるは、近江なる瀬田の長橋、洛西嵐山の渡月橋、岩國の錦帯橋、松江の大橋等なるべし。近年の架設にかゝる山陰本線餘部の大鐵橋、濱名湖今切の大鐵橋等はその大を以て有名なれども、風景に於ては、寧ろ嵐峽の保津川鐵橋、山北駿河間に於ける酒匂川の鐵橋、野澤附近なる阿賀川の鐵橋等が、兩側の翠巒に掩映し、脚下の急湍に調和したるに若かず。またその形態必ずしも大ならざれども、深峽の崖湍に架して有名なるは、甲州の猿橋にして、

雲埋老樹云々。
正端適所の作。

雲埋老樹、雲容變、
誰識行人斷腸恨、
水拍危巖、水勢驕、
一簑寒雨渡猿橋、

思ふに泰西の美術眼は主として都會の經營と人工の藝術とに集中せられ、天然の美を味はんとする念に於て、

の一絶、巧みに山川の景と人工の妙との調和を示せり。凡そ人工物による風景美は、その國々の傳統的習慣によること大なるを以て、元來同一型なる山川も、これを配することによりて、忽ち國家的特徴を示すを常とす。既に述べたる社寺橋梁、皆然り。泰西諸國に於ては、たとひ教會の設はありと雖も、それは概ね人家稠密の街頭に存して、山川の風景に影響すること少く、朱欄銅屋の五重の塔が、翠綠の間よりその半身を隠見せしめ、或は古色蒼然たる山門の花に埋れたる光景の如き、これを見ること能はざるは勿論、橋梁家屋等の配置に於ても、その風光に著しき美觀を添ふる場合少し。思ふに泰西の美術眼は主として都會の經營と人工の藝術とに集中せられ、天然の美を味はんとする念に於て、遙かに東洋民

遙かに東洋民族に及ばざるにはあらざるか。

族に及ばざるにはあらざるか。吾人は彼の人間のなると我の自然的なると、この二つの相違が、その風景の特徴の上にも著しく現れたるを見るなり。
〔「風景の科學」に據る。〕

佐々木指月
著述家、禪學者
神奈川縣の人
明治十五年生

二二 西湖の美觀

佐々木指月

西湖
支那浙江省杭州府城の西にある。

大陸的な支那の國土のうちで、西湖は人工的風景の唯一の典型である。この湖は周回五里餘りの小さな湖であるが、それは人工的努力が、如何なる程度まで自然を凌駕して、自然の與へ得ぬ藝術的感激を與へ得るかを十分に示してゐる。西湖の美觀は八分通り建築の美觀である。湖と周圍の山とは、一切の建築物を一層美しく見せるための背景であるに過ぎない。西湖に遊んで、私は始めて支那が建築の國であることを知つた。支那の建築は、西湖以外で見ると他の美術的建築の場合に於ける

五里
約二十キロ。

支那の建築は外部から眺むべく、また相當の距離を置いて觀賞すべき建築である。外から離れて眺めるための建築としては、支那の建築ほど優れてゐるのは世界にな

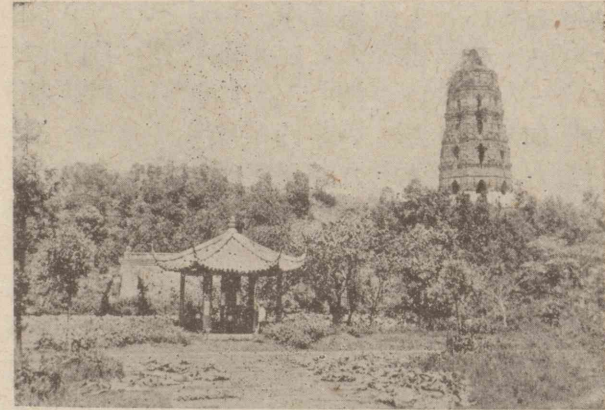
と同じく、用材が極めて粗悪で、裝飾もまことに大まかである。それ故家の内部に立ち入つて細かに眺めると、殆ど豫想した價值を失つてしまふ場合が多い。支那の建築は外部から眺むべき建築である、また相當の距離を置いて觀賞すべき建築である。随つて外から離れて眺めるための建築としては、支那の建築ほど優れてゐるのは世界にな



湖 西

い。我が國の建築物は、用材が非常に上質で、そして部分的の意匠と裝飾とが精巧を極めてゐる點に於て、世界に冠たるものであるが、外觀の美では到底支那とは競はれな

い。要するに日本の建築が内容を重んずるのに對して、支那の建築は形式に全力を注いでゐるといふべきである。



雷 峰 塔 (左下は晩鐘亭)

西湖に遊ぶ人は、湖を距てて南北の山の上に相對峙してゐる二つの古塔を見るであらう。南の塔は雷峰塔であり、北の塔は保叔塔である。どちらも古代の煉瓦で築かれた塔であるが、近寄つて見ると、所々破損して、外部や頂上には雜草や名も知れぬ灌木が生えてゐる。雷峰塔は太く短くして、鐘を伏せたる如く、保叔塔は細く高く鋭くして、槍を立てたる如く、兩相對して照映の妙を極めてゐる。この二つの塔があるために、

夢幻的空想力、
敬虔な神祕的印象。

玻璃のやうに透
明な水。

一尺
約三十センチ。

塵外に脱したや
うな氣持。

西湖の景色は俄かに夢幻的空想力を増して來るが、同時に千年二千年の古き歴史と傳統とを思はせて、敬虔な神祕的印象を旅人の胸に植ゑ付ける。

湖畔を離れて山路へ分け入ると、さまで高くないこの山を向側へだら／＼と下り切つた所に、清漣禪寺といふ寺がある。その寺の前には長方形の大きな泉水があつて、玻璃のやうに透明な水の中に、三四尺位の大きな鯉が無數に泳いでゐる。泉水の三方を、屋根の續いた平屋の建築物が取巻いてゐる。正面の欄間に「魚樂園」と書いた木彫の大きな額が掛けてある。そしてこれらの背の低い建築物は、三方から各自の古雅な姿を碧い水の底に映し合つてゐる。何たる調和、そして何たる寂さびであらう。そこに佇んでゐると、この身は全く塵外に脱したやうな氣持になる。

雲林寺といふは巨刹である。その廣い／＼境内には幾棟かの

樓門堂塔が臺を傾けて結構の壯麗を競つてゐる。

微かな雲煙が去來する。

水と建物との調和、建物と庭園との調和、湖畔に立ち並ぶ多くの茶館、酒樓、別荘、それらがあらゆる技巧を盡くして輪奐の美を競つてゐる面白さ。

樓門堂塔が臺を傾けて結構の壯麗を競つてゐるが、更に勝れたのは、その裏山の韜光院といふ寺の庭から脚下に見下した景色である。そこには幾つもの山が、峯を連れ、谷を合はせて、僅かに南面だけが開けてゐる。韜光院へ登る路の兩側には、竹林が續いてゐる。見渡す限りの山々は鬱蒼たる老樹を以て被はれてゐる。畫舫えいぼうの舳しほよりも更に反りを打つた樓門や堂の屋根が、山間樹間から現れてゐる。そしてそのあたりを微かな雲煙が去來する。南畫の謂はゆる山景樓閣圖は、こゝから創まつたものではなからうか。

しかし西湖の建築の粹は、何といつても最も多く湖畔の建物の中に現されてゐる。水と建物との調和、建物と庭園との調和、湖畔に立ち並ぶ多くの茶館、酒樓、別荘、それらがあらゆる技巧を盡くして輪奐の美を競つてゐる面白さ、皆それ／＼に得ならぬものであるが、その代表的なる建築美は湖の西畔にある劉莊といふ古い邸

柳里表
地大柱

宅に見出だされるであらう。そこには湖に對つて一つの樓門が建てられてある。そしてその樓門の様式は極めて複雑で、珍しいほど精巧である。それが靜かに水に映じてゐる光景には、實になんともいへないものがある。

西湖の美觀は實に建築の美觀である。

二三 兩國橋

石川雅望

大江戸より本所へ渡したる橋を、兩國の橋とぞ呼ぶ。いにしへのこの川よりをちは、有原業平下總しもかみの國なりければ、しか名づけたりと或人いひき。在五中將の、遠くも來にけるかなと侘び給ひし隅田川は、この上つ瀨にして、淺草なる大悲だいひ者もこの流より取上げ奉りけるとぞ。富士の嶺ねは更なり、ます蔭はなしと詠める筑波の山も、手にとるばかり見ゆ。そこら行きかふ船の多かるは、たゞ柳の葉をこき

石川雅望

小説家、狂歌師
六樹園、宿屋飯
盛等の號がある

江戸の人

天保元年(四九〇)

歿、年七十八

在五中將

在原業平。

ます蔭はなし

筑波根のこのも

かのもとに蔭はあ

れど君がみ蔭に

ます蔭はなし

(古今集)

こよなう。

散らしたるが如し。夏の頃は、殊に舟あまた集ひて、絲竹しとくの音ね川波に響き合ひて、おそろしきまで聞ゆ。げに廣き都の中にも、なぞらふべき所だになく、こよなう賑はしきわたりになん。



川づらには、葭あしを編みて隔ての垣
石となし、簀すい子だつ物あまた並べて、い
川こふ人ごとに茶をもてあきなふめ
雅みやびり。また同じつらなる假家かりやつくり
望のぞて、小弓の射場設けて營みとするも
のもあり。髪かみつかぬる家、舟貸す家

もちひ、くだもの、酒賣る軒など、所狭せまきまで立ち並びたり。すべて名高きあき人の家々は、かぞへ盡くすべうもあらねば、うちおきていはず。

この大路の中に、菰簾こもかけ假家かりやつくりて、外との方にあやしき繪を

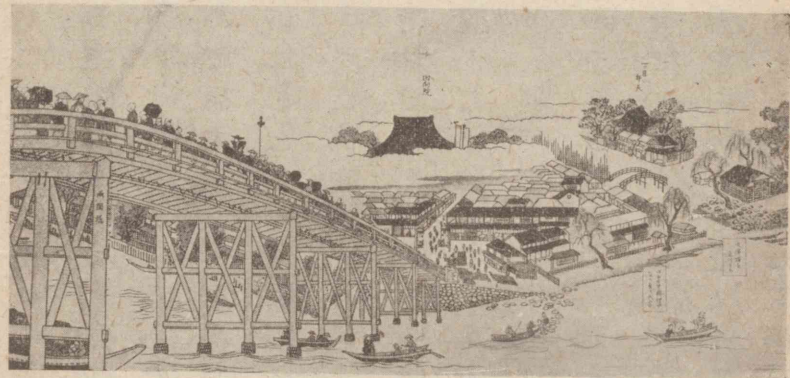
稀有。
前代未聞。

かきてかゝげたるあり。肩ぬぎたる男の、戸口に立ちて、口に手をあてて聲高く呼ばひいへるは、こは丹波の國なる奥山にて捕へつる山あらししてふ獸なり。世に稀有のものなり。前代未聞、またたぐひあらし。家づとによき物語の種ぞ。見たらん後に錢おこしね」と聲かるゝばかりのゝしる様は、鼯鼠の大きなるを捕へて、かう誇らしげにはいふなりけり。その隣も同じすぢなる假家つくりて、薄衣被きたる女子を高き所に据ゑて、うしろには白き青き紙を隔て張りたる明障子を立てつ。添ひゐたる男の、扇さかさまにとりて、まづしはぶきを先きにたてて、見る人に向ひていへらく、「この女子こそ、越の國のなにがしの村なる狩人の子なれ。殺生の罪の子に報い侍りて、かうあやしき身とは生まれにたり。されば十が一つ罪障の消え失せなんよすがともなれとて、こたび率て來て、普く人々に見せ奉るなり」とて、かの薄衣をとりのけつれば、げにいひ

しに違はず、顔より手足まで、一面に黒き毛生ひ續きて、目鼻のつき所さへわかつた。熊女と名づけつるも理にこそと、人々うちまもりあざむ。「かゝるかたはにさへ生まれたるを、かゝやかしう人集めて見することよ。かの女いかに侘しとや思ふらん。汝が名はいはじ」とうちたはぶれて出でぬ。

まねびいふ。

また高きあぐらに上りゐて、文机の上には、拍子木のかたしをおき、古き世の軍物語をまねびいふ。まことにや偽にや、おのが目に見しごと語りなすもをかし。片つ方に人あまた集ひ立てる所あり。何ぞと寄りて覗けば、黒き箱二つ並べ、これに大きなる太刀二つをかけ置きつ。若き男の裾ひき上げて、襷結ひたるが、高足駄穿きて、ついがさねのやうなるもの、二つ重ねたる上に乗りにて、この太刀を引抜き、さまざまに打振りて、とみに鞘に納めなどす。従者と見えたる男、これも襷ひき結ひて、これは今少し短き刀を抜き、ぬ

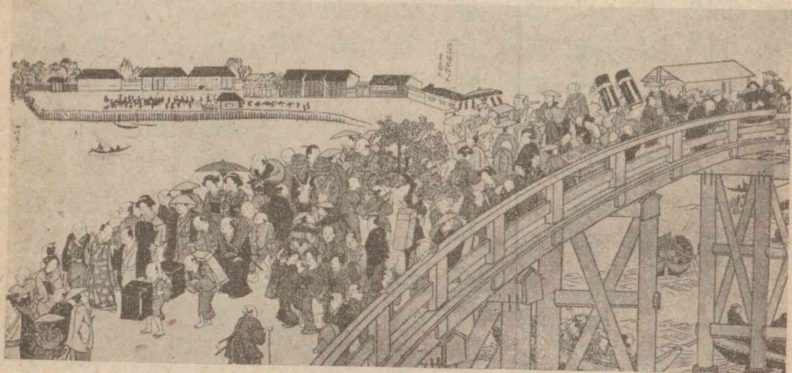


江戸時代

しとうち合ふまねをす。さてかの人の
 いへるは、かゝる太刀打のわざは、たゞ諸
 人の目を喜ばしめんわざなり。まこと
 我が家のいとなみは、薬ひさぐ業にこそ
 あれ。とて、さゝやかなる紙づつみ二つ取
 出て、この一つは反魂丹といひて、家に傳
 へたる良薬なり。疝虻のやまひ、あるは
 吐きくだしのやまひ、舟やまひ、酒やまひ、
 いづれに用ゐても頓にしろしあり。ま
 たこなたなるは、歯をみかく薬なり。こ
 の薬蟲歯を癒し、口の中のくさき香を
 除く。歯を白くせんことは、殊に速かな
 り。などいひつゝ、錢一つを、かの薬もてみ

おのがじし。

つれなしづくり
 て、錢もやらで
 出でて行く。



兩國橋

がくに、十日の月の雲間を出づるがごと
 照り輝きて見ゆ。みな人おのがじし求
 めつゝ去ぬ。
 こなたなる葭のかこひの中には、乞食
 の頭巾着たるが、扇を襟のあたりにさし
 て、上中下の人の上を、面白くまねび語る。
 うしろの方に、若き女三四人ならびゐて、
 かい弾き歌ふ。とばかりありて、錢求む
 とて、弾きさし立ちて、小さき籠を人の胸
 乳のあたりへもて来て、振り動かす。つ
 れなしづくりて、錢もやらで出でて行く
 人あるを、かの乞食見て、權兵衛の尉きた
 なし。まさなうもうしろを見せたまふ

さばかりよき子
を持たせ給ひ
て、世のきこえ
面目やおはすら
ん。

か。馬かへされよ。をうくと呼ぶに、皆人わらふ。さて筐なる
錢かぞへ見て、あなられし、百ばかり集りて侍り。いみじき御惠に
なんなどいひて、かけたる錢一つ取出て、これ御覽ぜさせ給へ。半
ばかりになりたり。物惜しみし給へる人の、かゝるもの取出て
たびぬ。これもて歸りて鑄物師にあつらへなば、六七文の錢や費
やさん。あなやうなし。などいひて取隠しつ。「さてますかげも
なき君達のみかげによりて、飢ゑず寒からず世を營み侍り。常も
妻子なるものを教へいさめていへらく、かならず殿ばらの御惠を
あだにな思ひそ。ひとへに親と頼み奉れとこそいひつけ侍りし
か。よう思へばおのれが親と聞え奉るからは、君だちのためにお
のれは子にて侍り。さばかりよき子を持たせ給ひて、世のきこえ
面目やおはすらん。などいへば、人また例のと、よみ笑ふこと限り
なし。

あすまくだり
東京くたし

ざればみ轉りい
ふ。

三丈
約九メートル。

また人形を頭より手足まであまたの絲もてつけて、唄ひ物に合
はせて、絲引きあやどり使ふを、南京のあやつりと名づけて、むかし
よりこゝにて行ふ。をさなきものは、皆これに心よせつゝ、つどひ
よるめり。柳の橋のかたにそひて、殊に高やかに假家造りたるあ
り。京くだり某の大夫と、いかめしく旗に書きたり。これも外の
方に繪をあまた書いて掲げ置きつ。入りて見れば、袴をばぬぎて、
上ばかり着たるもの三人ばかり、笛鼓打ちはやす。耳もとに聊か
鬢の髮残して、頭なごりなう剃り捨てたる翁の、同じごと上ばかり
着たるが、見る人にむかひてざればみ轉りいふ。かの大夫、頭に鉢
巻といふもの後ざまに結びて、手足皆赤き絹におしつゝ、みて、半臂
のやうなるもの着て出て來たり。見る人に向ひて、ひざまづき拜
して、さて太く長き竹の三丈ばかりもやあらんと見るを、中に立て
てあるに、すらくと登りて、竹のうらに身をとめて、扇取出て、う

仰ぎて舞ひ、そ
ばだちて踊る。

ちあふぎたるさまいとやすげなり。竹は右左になびきて、今や落
ちなんと、見る人心をのゝき目眩れて危ぶみおもふに、竹を膝にか
らみて居るさま、常の人の地に坐したらんごとし。さて或は立ち、
或は伏し、仰ぎて舞ひ、そばだちて踊る。その様一方ならず。これ
にさまゝの名あり。かの翁、笛鼓に合はせて指ざしいふ。その
曲の名は、

達磨大師の座禪の床

野中に立てるひともと杉

唐獅子の洞のいでいり

東山の大の字

梢傳ふ猿まろ

餌落したる山から

住の江のそりはし

こゝらあめり。

しりなる人に

あかゞり踏むな
しりなる子、我
も目はありさき
なる子。

(神樂歌早歌)

都の手ぶり

文化文政頃の江
戸の風俗を描寫
した隨筆風の作
品集

鴨 長明

鎌倉時代の歌人
法名蓮風
山城國加茂社の
氏人

建保四年(一一三二)
歿、年六十三

安元三年

第八十代高倉天
皇御宇の年號
治承元年(一一三二)

戊の時
今の午後八時。

松に這ひたる藤波

猶ほこゝらあめり。さて長く引きはへたる綱の上を、傘さして

渡る。長き紙の上をも渡るに、皆足ぶみを拍子に合はせて踊る。

見る人あざみ興ぜざるはなし。事はてぬれば、したゝかに太鼓打

ちならして、もと見し人は替りねと呼ぶ。遣戸一つあけて人出す

に、押しあひて出てもやらず。ほとゝしりなる人に、輝も踏まれ

つべし。

(『都の手ぶり』)

二四 火災と地震

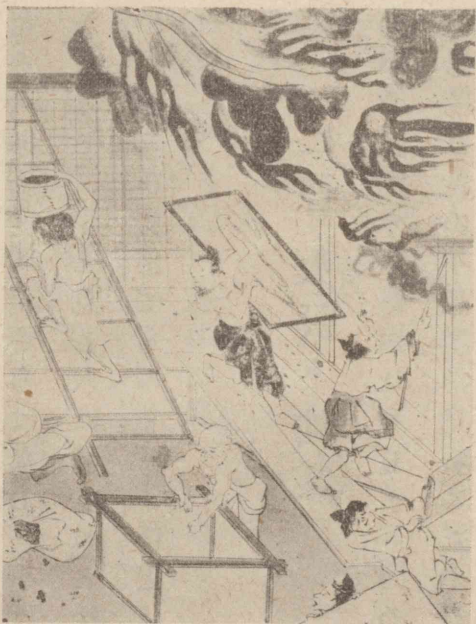
鴨 長 明

おのれ物の心を知れりしより、このかた、四十あまりの春秋を送
れる間に、世の不思議を見ること、やゝ度々になりぬ。去んぬる安
元三年四月二十八日かとよ。風烈しく吹きて、静かならざりし夜、
戌の時ばかり、都の巽より火出て来て、乾に至る。はてには朱雀門、

巽、乾
南東、北西。

吹き迷ふ風に、
とかく移り行く
程に、扇をひろ
げたるが如く末
廣になりぬ。

大極殿、大學寮、民部省などまで移りて、一夜がほどに塵灰となりに
き。火本は樋口富小路とかや。舞人を宿せる假屋より出て來た



(起 綠 神 天 野 北) 雞

りけるとなむ。吹き迷ふ
火風に、とかく移り行く程に、
扇をひろげたるが如く末
廣になりぬ。遠き家は煙
にむせび、近きあたりはひ
たすら焰を地に吹きつけ
たり。空には灰を吹きた
てたれば、火の光に映じて

一二町
一町は約百九
十トル。
その中の人うつ
し心あらんや。

あまねく紅なる中に、風に堪へず吹き切られたる焰、飛ぶが如くに
して、一二町を越えつゝ、移り行く。その中の人うつし心あらんや。
あるは煙にむせびてたふれ伏し、あるは焰にまぐれて忽ちに死し

七珍萬寶さなが
ら灰燼となり
き。
男女死ぬる者數
千人、馬牛の類
邊際を知らず。

ぬ。あるはまたわづかに身一つ辛うじて遁れたれども、資財を取
出づるに及ばず、七珍萬寶さながら灰燼となりにき。その費えい
くばくぞ。このたび公卿の家十六焼けたり。ましてその外は數
を知らず。すべて都の中、三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者
數千人、馬牛の類邊際を知らず。人の營み皆愚かなる中に、さしも
危き京中の家を作るとして財を費し心を悩ますことは、勝れてあぢ
きなくぞ侍るべき。

元暦二年
第八十二代後鳥
羽天皇御宇の年
號。文治元年二
八月。

また元暦二年のころ、大地震ふること侍りき。そのさま尋常な
らず。山は崩れて川を埋み、海はかたぶきて陸をひたせり。土さ
けて水湧きあがり、巖われて谷にまろび入る。渚こぐ船は浪にた
だよひ、道行く駒は足の立處をまどはせり。況んや都のほとりに
は、在々所々、堂舎塔廟、一つとして至からず、或はくづれ、或はたふれ

恐れの中に恐るべかりけるは、たゞ地震なりけりとぞ覺え侍りし

はかなげなる跡なしごとをして遊び侍りし。

一寸
約三センチ。



鳴らず。龍ならねば雲にのぼらんこと難し。恐れの中に恐るべかりけるは、たゞ地震なりけりとぞ覺え侍りし。

その中に、ある武士のひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、築地のおほひの下に小家を作り、はかなげなる跡なしごとをして遊び侍りしが、俄かに崩れ埋められて、あとかたなく平にうちひさがれて、二つの眼など、一寸ばかりうち出だされたるを、父母かへて、聲も

子の愛しみに、は、猛き武士も恥を忘れけりと覺えて、いとほしく道理かなとぞ見侍りし。

齊衡

第五十五代文徳天皇御宇の年號(五十四、五十五年)

方丈記
世相人情の非を歎いて京都日野

惜しまず悲しみあひて侍りしこそ、あはれにかなしく見侍りしか。子の愛しみに、は、猛き武士も恥を忘れけりと覺えて、いとほしく道理かなとぞ見侍りし。

かくおびたゞしくふることは、暫しにて止みにしかども、その餘波暫しは絶えず、尋常におどろくほどの地震、二三十度ふらぬ日はなし。十日二十日過ぎにしかば、やう／＼間遠になりて、あるは四五度、二三度もしは一日まぜ、二三日に一度など、大かたそのなごり、三月ばかりや侍りけん。四大種の中に水火風は常に害をなせど、大地に至りては殊なる變をなさず。

むかし齊衡のころかとよ、大地震ふりて、東大寺の佛の御首落ちなどして、いみじき事ども侍りけれど、猶ほこのたびには如かずとぞ。乃ち人皆あぢきなきことをのべて、いさゝか心の濁りもうすらぐかと思えしほどに、月日かさなり年へにし後は、言の葉にかけ

山に隠退した前
後の感想録。

吉江喬松

佛文學者、詩人
文學博士
早稻田大學教授
孤雁と號す
長野縣の人
明治十三年生

更に人間の一生
を通じて見る
と、曇天の多い
國に住むこと
と、日光の明る
い土地に住むこ
ととが、それぞ
れの住民の異な
つた氣質を作り
出す上に、いか
に與つて力ある
ことであらう。

ていひ出づる人だになし。すべて世の中のありにくく、わが身と
すみかとの、はかなくあだなるさま、またかくの如し。いはんや所
により身のほどにしたがひつゝ、心をなやますことは、あげてかぞ
ふべからず。
〔方丈記〕

二五 人間生活と自然

吉江 喬松

我々を取巻いてゐる天然の現象は、我々が普通思つてゐる以上
に、我々の日常生活と密接な關係を有つてゐるものである。單に
空が晴れてゐるとか、曇つてゐるとかいふことだけでも、それがど
れだけ我々の氣分に、また我々の仕事の上に影響することであら
う。更に人間の一生を通じて見ると、曇天の多い國に住むことと、
日光の明るい土地に生活することとが、それと、の住民の異なつ
た氣質を作り出す上に、いかに與つて力あることであらう。

宵越しの錢
執着

氣象臺の報告は、東京ぐらゐる氣候の變化の多い所が、歐洲諸國の
大都市にはないことを知らせる。實際、東京に於ては、一日の中、ま
た一夜の中に於て、随分溫度に變化が來る。今まで爽かに晴れて
ゐた空が俄かに曇つて、その中から氣味の悪い風が吹き出して來
る。人間の豫定した計畫が、天然現象の變化のために、餘儀なく中
止せしめられ、また變更せしめられる場合が屢ある。かういふ變
化が、東京人の性格の上に、また徳性の上に影響せずにはゐられ
てあらうか。江戸ッ兒の有つ氣短な氣質、宵越しの錢を持たないの
を誇にしてゐるやうな氣前さつぱりしてゐて、執着を感じない、或
時は激しても、直ぐに水のやうに流してしまふ性向、それらは多數
者の集合生活の中から、一つは必然的に生じて來た現象でもあら
うが、また確かに、この地の自然現象が與へる不安と、頼みがひなさ
とが、彼等の素質を織り出して來たものに相違ない。

日本人の、死を見ること歸するが如き氣質は、日本の自然を見ずには解釋することが出来ぬ。暴威を振るふ。

『近代の日本とその進化』を書いたフランス人リュドブイユクナドオ氏は、日露戦争に際し、日本の研究に来て、内地にも戦地にも居つた人であるが、この人が前記の著書の中で、次のやうに言つてゐる。「死を見ること歸するが如き日本人の氣質は、日本の天然自然を見ずには解釋することの出来ないものである。日本に於ては、洪水、暴風、地震、海嘯、噴火などのために、年々幾千幾百の人命が失はれる。日本では、天然が思ふまゝに暴威を振るつてゐる。日本に於ては、火災すらも天災の一種である。これらの天然現象は、日本人をして屢不慮の死を目撃せしめ、生命の頼むに足らないことを感ぜしめる。日本人に取つて、生ははかなくして頼むにたらず、随つて死ぬる時期を誤るのは寧ろ恥である。それ故、何か事の起つた場合、日本人は率先して命を投げ出さうとするのである。」これも確かに一つの解釋に違ない。戦争に際して死を急ぐとか、あ

天然を制御する。

日本人は、天然に身を任せ、命を委ねてゐる。

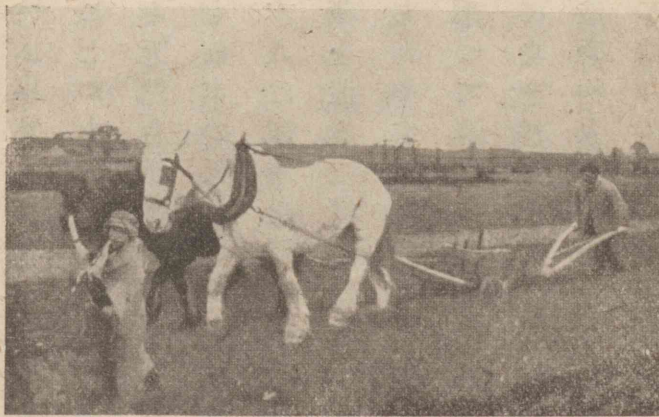
島國の日本に於

る美的感激の下に死を選ぶとか、生よりも死を、現實よりも虚無を選ぶ宗教が、より強い勢力を有つとかいふ事實も、日本に於ける天然現象を窮めずしては解せられないことかも知れぬ。この昔ながらに暴威を振るつてゐる天然を制御するには、日本人が餘りに弱いのであらうか、それとも、日本の天然が制御せられるには餘りに荒いのであらうか。日本人は家屋を建てるのに、大切な器具や物品を藏するためには土藏を造る。けれども、人間が住むためには風雨に害はれ、火水に破られやすい木造の家を建てる。それは大洋の中を一葉の小舟に乗つて漂つてゐるやうなものである。それ程日本人は、天然の懷に身を任せ、天然の力に命を委ねてゐる。そして人間が構成した造營物、人間が工夫した庭園、人間が集合してゐる都市の上を、天然が踏み荒して通り行くその足跡を「寂」と呼んで、一種の消極美をそこに認める。それほど島國

ては、天然と人事とが混淆し、復生してゐる。

の日本に於ては、天然と人事とが混淆し、復生してゐるのである。これを淡青の空の下に、曾て地震に脅かされたこともなく、大きな嵐の荒れたこともなく、豊穰な黒土を耕して、麥の穂波を漂はせ、葡萄の紫玉を連れ、しめてゐるフランスの農人等の生活と對照して見ると、兩國民の性格の相違の原因の一半を、人間生活の直接環境たる天然現象の相異に歸せしむることも、あながち無理なこととは言はれないのである。

また或歴史家はいふ。「或團體と團體とが相争ふ場合などに、それが戦闘であらうが、談判であらうが、



フ ラ ン ス の 田 園

ポーツマス
米國東北部の軍
港、日露戦争協
和會議地。

心理過程。

その日の天候が争闘者相互の上に多大なる影響を與へるものである。戦闘と天候との關係、これはいふまでもないことであるが、談判などの場合でも、或病氣がちな神経過敏な代表者が選ばれて、その任を果す場合に、その日が爽かな晴天であることと、陰氣な曇日であることが、その團體の利不利にどれほど關係があるか判らない。なるほど、ポーツマス談判の日が晴朗であつたか、陰鬱であつたかといふことは、精細な觀察眼を有つた歴史心理學者の見逃し難い事象であるに違ない。

人界の大事變が起るに先だつて、天然現象に或變動が現れる。古代人は、それをその事變の徵候の如く、前表の如く考へた。しかしそれは人間の心理過程に對する誤つた觀察である。自然と人事とは、その如く前兆と事件といふ風に關係してゐるものではなく、寧ろ天然現象の變化によつて不安動搖を引起されてゐる人心

サン・フランシスコ
米國西海岸第一の良港。

シーザー
(西 100—44)
ローマの大政治家。

に、言ひ換へれば、常とは異なつた意識で生活してゐる人々の間に、事變が生じて來るのである。天變地異のあつた後、殊に大地震や、大洪水などのあつたすぐ後には、必ず人間同志の道德上の動亂が起る。先年サン・フランシスコに大地震があつた後、種々の罪惡が殆ど公然に行はれて、全市の風教が全く亂れてしまつたといふが、これはサン・フランシスコに限つたことではない。自然力のため人間の文明が全く玩弄物のやうに破壊せられると、今まで均整を保つてゐた人心が動亂して、常時は押さへられてゐた本能が亂れ狂ふのである。

これは決して本能ばかりではない。常は押さへられ、制せられてゐた不平が、一時に爆發することもある。また當然起るべき事象が、この自然の攪亂期に乗じて頭をあげて來ることもある。シーザーが刺客の手に斃れる前に、大暴風雨があつたとか、大鹽平八

大鹽平八郎
大阪の輿力で陽明學者であつたが、天保八年三四月に亂を謀り、事成らずして自殺した。年四十六。

郎が兵を擧げた前日に、日光が不思議な色を放つたとかいふが、これは事變の前兆ではなく、寧ろ誘因であり、舞臺であり、背景であり、伴奏樂であらう。要するに、人間の歴史上の大事變を、自然の手が一緒に刻み出し、織り出して來るのである。子供が風の吹くのを好むと同じやうに、犬が雪の降るのを好むと同じやうに、天然の異變の中で、人々は隠れた意識を覺醒せしめて、飛躍するのである。

〔自然美論〕

正岡子規

俳人
名は常規
愛媛縣松山の人
明治三十五年三
委三歿、年三十
六。
七浦
千葉縣安房郡。

二六 鰯 引

正岡子規

七浦の夕雲赤し鰯引

秋淋し毛蟲はひ行く石疊
すごい風がたつと月さし上る野分哉
野が木枯しの風
行き暮れて大根畑の月夜かな

錢よむ音

乞食こじきの錢よむ音の夜寒かな
 穴あなにのぞく餘寒の蟹の爪赤し
 薪きを割る妹一人冬ごもり (草庵)
 いく度も雪の深さを尋ねけり (病中)
 雪残る頂一つ國境

ゆふやけて日和
 になりぬ秋の雲
 子規

傘高低

春雨や傘高低に渡舟
 島々に灯をともしけり春の海
 汽車過ぎて煙うづまく若葉かな
 青々と障子にうつる芭蕉かな
 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

ゆふやけて日和
 になりぬ秋の雲
 子規

子規筆蹟

一本は衛門とい
 つて澁柿の中
 大將株

霜に飽かして黒
 みを帯びるやう
 になつたのを。
 甘露の凝つたや
 うなのが。

明治四十年 (二五七)

二七 柿

我が家の庭に六本の柿がある。

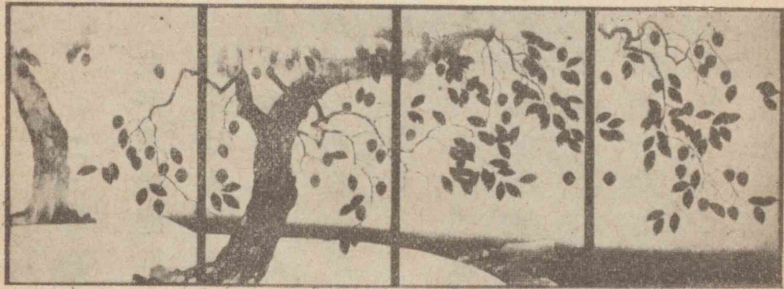
一本は衛門といつて澁柿の中の大将株といはれるものである。普通樽柿にするのがこれで、若い中に澁を抜けば、さく／＼と齒がかりのあるのが食はれる。やゝ熟したのをさはせば、もや／＼と柔かいのが食べられる。霜に飽かして黒みを帯びるやうになつたのを、もいで来て、棚に並べて澁の抜けるのを待てば、甘露の凝つたやうなのが啜られる。

私がこの木を植ゑたのは、明治四十年の秋であつた。高さはやうやく一間餘り、幹は子供の腕ほどのものであつたが、何となく萎縮ちぢけたやうで、枝も伸びず、花もろく／＼咲かず、随つて實も結ばない。もどかしさに枝先を折り込みなどして、生氣の回復するのを

新しい土地に縁
づいて固くなつ
たしこりが段々
とれて來たと見
えて。

大飛びに飛ん
で。

その中に脆い、
首の長い、鈴蘭
のやうな白い花
が咲く。



柿 (久邇宮御襖飛田周山筆)

待つてゐるうちに、新しい土地に縁づいて固
くなつたしこりが段々とれて來たと見えて、
三四年目から盛んに花をつけ出して來た。
そして一昨年まととしは、申譯のやうではあつたが、と
にかく一箇の大きい實を結んだ。それが去
年は二十幾箇を結ぶやうになり、今年は大飛
びに飛んで、百以上の花より美しい實を見せ
るやうになつた。

凡そ果物の中で、柿くらゐ人の心を動かす
ものはあるまい。薄い黄みを帯びた透き通
るやうな新芽は、袖や帽子や箒の觸るゝ度毎
にぼろり／＼と缺ける。その中に脆い、首の
長い、鈴蘭のやうな白い花が咲く。やがて實

豊富な秋を約束
してゐた青い實
が、頻りに枝を
離れて、ぼたり
ぼたりとみじめ
な亡骸を地上に
横たへる。

八朔

舊曆八月一日を
いふ。

二百十日

立春(新曆二月
三四月)より二
百十日目のこ
と、九月一日頃
に當る。

兼好法師

吉野朝時代の文
學者。姓は卜部、
吉田。正平五年
(1100)寂、年六
十八。

が見えて、それが豆粒ほどになると、毎日掃くやうに地に落ちる。
それから慈姑くわだま大になり、鶏卵けいりょう大になる變り目／＼には、豊富な秋を
約束してゐた青い實が、頻りに枝を離れて、ぼたり／＼とみじめな
亡骸を地上に横たへる。秋になつてもう大丈夫と胸を撫で下し
てゐると、やがて八朔、二百十日の大暴風雨おほあまが襲つて來て、大きな
つた實を容赦なく枝と共にもぎ取つて行く。赤い姿を枝先に現
して人の目を悦ばすやうになると、今度はその美しい色が鳥の目
を惹き、悪太郎の心を惹いて、無慚な嘴や石ころに傷つけられる。
僅かに一箇、二箇ではあるが、半年の間に續いて起る、このやうな
災厄を危く免れて我々の口にはひる貴重な一箇、二箇である。そ
の一箇が一年にして二十箇となり、また一年にして百箇となるの
を見る喜を何に譬へよう。『徒然草』の兼好法師は、この世のほだし
もたらぬ身に、たゞ空そらの名残のみぞ惜しきと言つてゐる。私は世

のほだしも澤山にもつてゐるが、空の名残、自然界の名残、殊に手しほにかけた草木の名残は、取りわけ私に取つて盡させぬ未練である。「柿の未來を考へるだけでも死なれない。」私が茶飲話によく言ふ戯言は、實に腹の底から湧き出でる眞の私の聲である。

一本の名は鶴の子。實の形や大きさが鶴の卵に似て居るからの名であらう。
嘴を縮め、翼を收め、足を隠した長丸い圖案式の鶴。
秋の眞味を暗示する。

一本の名は鶴の子である。これは實の形や大きさが鶴の卵に似て居るからの名であらう。或はその色が、あの品のよい大鳥の丹頂に似てゐるための名かも知れぬ。或はその形が、嘴を縮め、翼を收め、足を隠した長丸い圖案式の鶴に似てゐるための名かも知れぬ。この柿の特色は、早熟の點にある。堅い歯ざはり、水氣の乏しい味、いづれも人に舌鼓を打たせるほどのものではないが、九月に入る勿々、瓜に次ぎ無花果に並んで秋の味の先驅をするところに、他の後詰の優秀者の及ばぬ値打がある。青いながらに熟して高い秋の眞味を暗示するところや、こましやくれた相貌をして、旗

持、喇叭卒の役を勤めるところなども、いはゆる新人の生活を象徴してゐるやうに見えて、何ともいはれぬ面白さである。

我が鶴の子は衛門と一緒に四十年の秋に求めたので、もとは大人の親指位のものであつたが、翌年から花を持ち、その翌年には數箇の初生を見せ、今ではもう、一年おきに五十顆乃至百顆を結ぶやうになつた。年毎にずん／＼とふとつて行くのを見ると、數年後の未來が待ち遠しさに胸も躍るばかりである。

一本の名は禪寺丸。黒砂糖式の甘味を有つた柿である。
舊都式の甘味が

一本の名は禪寺丸といつて、黒砂糖式の甘味を有つた柿である。しかしその黒砂糖式の甘味は、場末の菓子屋の餅菓子に見るやうな味ではなくして、京都式の凝りぬいた黒砂糖式の菓子に見るやうな味である。この柿の味の匂は、硬からずとろけざる間にある。古代風の黒ずんだ赤みを帯びて、柔かながらしな／＼とした手ざはりのまる／＼した奴に、皮ながらかぶりついて、舊都式の甘味が

齒に沿うて唇に流れ出るのを啜る時の心持は、實に類ひなきものである。

齒に沿うて唇に流れ出るのを啜る時の心持は、實に類ひなきものである。少し尖りめのたつぷりした丸い形、厚みのある古代風の赤い色柿の中で最も柿らしい外観を備へたのはこの禪寺丸であらう。

一本は縞御所。

一本は縞御所。これは名なしのまゝで、買ひとつたので、我々は偶然にも養ひ親兼名づけ親になることになつた。形は蜂屋そつくりで、蜂屋よりは少し小さく、皮に美しい青みが、つた縞があり、そして甘露を啜るやうな味は、品のよい御所柿そつくりである。年々なる



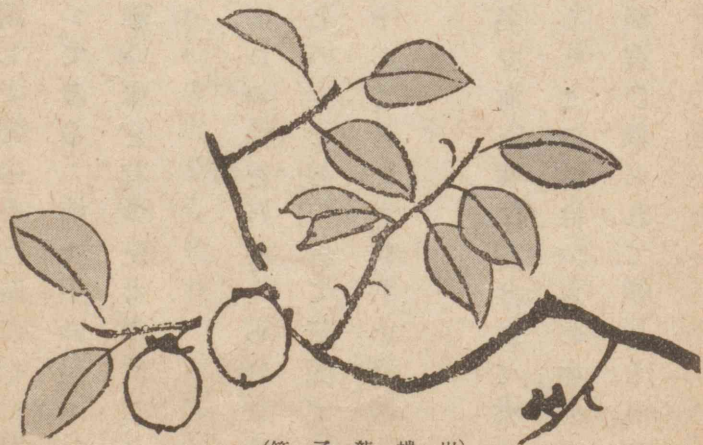
柿

一本の名は妙丹といひ、また梨柿とも呼ばれる。

はずむ

数は極めて少いが、色と形と味はひとの三方面に於て、類ひなき高尚な趣味を見せてくれるはこれである。

一本の名は妙丹といひ、また梨柿とも呼ばれる。黄色みの勝つた赤色で、平たい、大きい、尖頭（せんとう）の凹んだ、そして熟すると笑み（わら）まれるといふ特色を有つてゐる。味はひ盛りは張り切つてまだ笑みわれぬ境にある。硬性が極度に發達して、まだ柔性に轉ぜざる頃合にある。ナイフを當てれば、ぱりつとはずんで割れ、齒に掛けると、さくくと梨子（りし）を食ふやうな音がする。そして多量の水氣（みづけ）を含んで、和（わ）三（さん）



(筆子龍端川)

盆ぼんのやうな淡泊な上品な甘味がある。色といひ、形といひ、味といひ、禪寺丸や衛門や縞御所とは全く反對してゐるが、同時に他の種類の全く眞似られぬ特殊の風味を有つてゐる。柿の中の最も柿らしからざるものであるが、しかも捨て難い味を有つたものはこれである。

大正天皇がまだ東宮におはした時に、この柿を好ませられて、遙かに濃尾地方から御取寄せになつたといふことを、曾て新聞で見ることがあつた。我が庭に養はれて、やんごとなき新しい縁故ゆかりをもつて居るのも、またこの柿である。

最後の一本は、まだ名を有たない。名を有たずに養はれて来て、未だに名を興へられずにゐるのである。この柿は六本の中の最年長者であつて、幹も一番太つてゐるが、買ひ取られてからもう七年になりながら、今に一箇の實をも見せたことかない。察するに、

大正天皇
第二百三十三代
(御在位三五三—
三五六)

最後の一本は、
まだ名を有たない。

順應。

大きくなつた養子が養家になじまぬやうに、里離れの苦痛に心を取られて、まだ新しい土地に順應し得ぬのであらう。痛ましいことである。が、たゞ一つ怪しいのは年々多くの花を見せることで、枝一ぱいに穢いほど咲きながら、つひに一つの實をも止めぬのは、どういふ心であらうか。

私はこの一本に對してしばしば、特別の手當を施した。寒肥も多くやつた。二三度も枝先を折り込んだ。冬は鹽俵で根本を包んで寒氣を防いでやり、夏は棕櫚の毛を幹に巻いて蟻を防いでやつた。それから五六年になるが、未だに何の反應もない。私は彼を買ひ取つたその年から、一度實を見て名をつけようと待ちかまへてゐる。彼は遂に名なくして一生を終るのであらうか。年々夥しい花を見せるのみで、遂に一箇の實をも結ばぬのであらうか。但しは氣永に我が心遣ひの厚薄を試みた後に、大器晩成の大豊饒

反應

大器晩成の大豊饒

を以て報いるつもりであらうか。名なき柿よ、汝は我が庭の謎である。

風變りの濃密な味。

四寸
約十二センチ。

私が我が庭に迎へようと思ふ柿は、この外にも數々ある。甘露の凝つたやうな味を有つた御所柿も、その一つである。御所に似て更に大きい百目も、その一つである。先尖りの楕圓の大きな實と、風變りの濃密な味とを與へる蜂屋も、その一つである。木が痛痛しく見えるほど枝を撓めて、隙間もなく眞赤に實る身不知も、その一つである。徑四寸程のすばらしく大きな實に凡ての仲間を壓倒して、日本一を誇るやうに見える開山もその一つである。

柿はその實の色と形と味との凡てに於て、我が秋の庭に於ける私の愛である。私は曾て我が庭に柿の字を縦斷した名を負はせて木市園と呼んだことがあつた。木の市に圍まれて、緑の空氣を十分に吸ふことが出来れば、私の半分の望は足りる。柿の木に蔽

はれて、赤い甘い實を十分に味はふことが出来れば、他の半分の望は足りる。

菜ど大根と蕪の葉を隙間もなく敷き詰めた緑の絨毯を地上の背景とし、高く澄んだ青空を天上の背景として、無骨な木の枝に眞紅の瓔珞を綴る柿よ。花紅葉の美觀と果物の美味とを併せ與ふる柿よ。秋の趣味の凝つて成つたやうに見える柿よ。汝は我に取つて秋の旗標であり、そして秋の王である。

二八 我が古文學の概観

日本の文學は千二百餘年の間、連綿たる切れ目なしの發達を遂げました。そして不思議なことには、各時代の文學が日本の民族性のいろ／＼な方面を、順繰りに描き出だしてゐるやうに見えます。更に不思議で有難いのは、各時代に於ける國民生活の興味の

汝は我に取つて秋の旗標であり、そして秋の王である。

各時代の文學が日本の民族性のいろ／＼な方面を、順繰りに描き出だしてゐる。

中心、各時代に於ける國民が、理想としてそのために生き、そのために死んだ生活が、それらの時代の傑作の中に遺憾なく立派に描かれてゐることとあります。我等は我が歴代の文學に於て、日本の國民性はどんなものか、その國民性の各がどれほどに發達せしめられたかを知ることが出來ます。日本の文學史はまことに誂へたやうに、豫定の計畫によつて組み立てられたやうに出來て居ります。

まづ大昔から奈良朝いつばいの文學は、國民の備へたものゝ性質趣味をそのまゝ、素直に歌ひ出したやうなものでありました。この時代の國民の性情はまだ偏頗な發達をして居りません。彼等には優しい性質も、雄々しい性質も、おどけた性質も、武を重んずる性質も、文を重んずる性質も、精神を重んずる性質も、肉體を重んずる性質も、仲よく調和して存在して居りました。隨つてこの

一、大昔から奈良朝いつばいの文學。

奈良朝

第四十三代元明天皇の寧樂遷都(和銅三年、一三三〇)より第五十代桓武天皇の長岡遷都(延暦三年、一四四〇)の頃に至る七代七十七年の間。

古事記

前出(一〇六頁)

日本紀

前出(一〇七頁)

祝詞

祭儀やこれに類する儀式の際に、神前に於て唱へる詞、我が國最古の文章の一。

宣命

天皇の天命を純粹の國語を以て、宣布した文書。漢文で書かれた詔敕に對して和文の詔敕をいふ。

萬葉集

前出(一〇九頁)

二、平安朝の文學

平安朝

桓武天皇の平安遷都(延暦十三年、一〇二四)より宇多天皇の建久鳥羽(八十二代)の代(八十三代)の代(八十四代)の代(八十五代)の代(八十六代)の代(八十七代)の代(八十八代)の代(八十九代)の代(九十代)の代(九十一代)の代(九十二代)の代(九十三代)の代(九十四代)の代(九十五代)の代(九十六代)の代(九十七代)の代(九十八代)の代(九十九代)の代(百代)の間。

時代の文學には、彼等の直情がそのまゝ、いひ表されて、優美なこともあり、莊嚴なこともあり、滑稽なこともあり、荒つぽい表し方もあり、細かい表し方もあり、氣高い精神的行動の現されたものもあり、いろいろな情念のあらはに歌はれたものもあります。但し、概して言ふと、明きを愛し、清きを愛し、直きを愛する國民性のうぶな形を取つて、素直に現れたところが、この期の文學に於ける第一の味はひどころで、『古事記』『日本紀』の中にある古歌を始として、祝詞や宣命や『古事記』や『萬葉集』など、一つとしてこの趣味の現れて居らぬものはありません。

ところが一轉して平安朝に入ると、國民の諸性情の中、優美なる方面のみが、片寄つた發達をするやうになりました。太古から奈良朝までは、謂はば國民が修業中の普通教育時代で、それが平安朝といふ専門學研究の第一期に於て、『優美』といふ一科を選んで、その

宣命(天皇の國民に對して詔を和文に下すこと)

色讀、充分體感、
體感、
色讀、充分體感、
體感、

研究、實習、色讀、體感に、思ひきり骨を折つたとでも言ひませうか。
とにかく趣味の上からいふと、平安朝は優美といふ方面に於て、國
民の性情がどれ程まで發達し得るかを試した時代であります。

菅原道眞、在
原業平、小野
小町、紀貫之、
紫式部、清少
納言、『伊勢
物語』、『古今



(筆 嵯 香 口 谷) 宴 の 水 曲

伊勢物語
在原業平の歌を
中心とした歌物
語。
古今集
我が國最初の敍
撰和歌集。
源氏物語
紫式部の長編小
説。
枕の草子
清少納言の隨筆
集。

集『源氏物語』『枕の草子』といふやうな人名書名が、この時代を代表
して後世に仰がれてゐることを考へて見ても、この時代の特色が
想像されます。
私は曾てこの時代の相を譬へて、こゝに聰明にして美を愛する

一團の人間
公卿殿上人、即
ち大宮人等を一
かたまりの仲間
と見た言表。

一廓の土地
京都を指す。

一團の人間があつて、國民中の最も高い階級に位し、その國最高の
教育を受け、その國特殊の文化の成立ちかけた時に生まれ出でた
と假定せよ。この時國民の中の他の一團が彼等を保護して、衣食
はもとより政治、軍事の實務に至るまで、うるさい事は一切我々が
引受けるから、御心配に及びません。たゞ、優美な風流の道に
心をひそめて、美しく美しく世をお送りなさい。と言つて、山水の明
媚なる一廓の土地をその遊樂の場所に當てがつたとせよ。かく
して彼等は生活の苦しみを知らず、事務の面倒を知らず、戦争の慘
しさを知らず、感情文藝の世界にほしいまゝに遊樂して二百年、三
百年を過したとせよ。その結果、一代の風潮が優美本位、感情本位、
文藝本位になるのは見易き道理である。随つてその弊が流れて
文弱になり、奢侈になり、剛健な氣風が地を拂ふやうになるべきこ
ともまた、争はれぬ自然の徑路である。平安朝の公卿生活はまさ

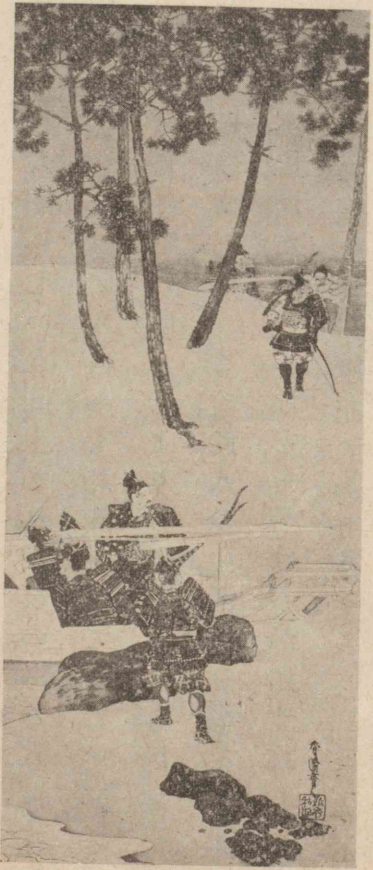
しくかくの如きものであつたと言つたことがあります。この時代の大宮人は、世の中に人間らしき人間は雲の上の我等ばかりと思ひ上つてゐたので、人民は無論のこと、一舉手一投足の勞で彼等を擲り飛ばし、蹴倒し得べき實力を有つてゐた武人さへも、彼等を崇め羨んでハイ〜とお辭儀をして居りました。さうして當時の人がすべて尊貴無上と思つてゐた、この大宮人の生活は、美しく『源氏物語』や『枕の草子』や『古今集』や、その他の文學に描き出されたのであります。

これが源平時代を経て鎌倉時代になると、急轉して剛健質樸を貴ぶ武力本位の世の中となりました。女性の世界は男性の世界となり、笏の世界は劍の世界となり、衣冠束帶の世界は甲冑物の具の世界となり、そして感情の世界は義理の世界となりました。源氏の君の美しき姿を寫して「虎狼だに泣きぬべし」と言つた情の世

三、鎌倉時代とその文學。

鎌倉時代
後鳥羽天皇の建久三年(一一五三)より第九十九代後龜山天皇の京都遷幸(元中九年、一三三〇)の頃まで約二百年間。

の中は、日本無雙の弓取と稱せらるゝことを無上の榮譽とする力の世の中となりました。優美趣味、女人趣味の研究實行を極端までしつゝ、さうといふのが、この時代の意氣であります。



七 騎落 (谷口香幡筆)

この時代の思潮に促されて、鎮西八郎、惡源太義平の徒が舞臺の表面に躍り出して來ました。なよ〜とした女の中から巴御前が出れば、寂滅爲樂の専門家、泣き蟲、泣かせ蟲の僧侶の中から辨慶、海尊、一來法師の如き、僧衣を端折つて長刀を手ばさむ豪傑僧が飛び出して來ま

のやくめつたのしつとるす

増鏡
承久の亂、元弘の亂を中心とした歴史物語で、室町時代の作。

平家物語

平家一族の榮枯盛衰を記した歴史物語で、軍記の隨一。

四、室町時代の文學。

室町時代

後龜山天皇の元中九年(一三五三)頃より第七代後陽成天皇の慶長五年(一六〇〇)關ヶ原役の頃まで約二百十年間。
五、徳川時代の文學。

した。武家、武力を本位とする世の中は、軍記の作者をして武家偏重の穩かならぬ記述をなさしめ、平安朝趣味なる『増鏡』の著者をして北條氏が京都から請ひ招いた惟康親王に都還りを願つた事に對して「將軍都へ流され給ふ」といふ不思議な敘述をなさしめました。この時代に於て人間らしい人間、生まれがひのある人間は、ただ武人のみでありました。武人自らも昂然として我こそ國民の精華であると思へば、百姓町人はもとより公卿殿上人も目をそばだてて武人を憚り敬ひました。この武人の生活、心意氣、その平安朝文明に取つて代る慘澹たる苦心などを活けるが如く寫したものが『平家物語』その他の謂はゆる軍記であります。

鎌倉時代に次いで、平安朝の優美趣味と鎌倉時代の剛健趣味との調和を試みたのが室町時代で、その趣味と、その趣味に生活した當時の武人の心意氣とを歌つたものが謡曲であります。その後

徳川時代

後陽成天皇の慶長五年(一六〇〇)頃より慶應三年(一八五七)慶喜大政奉還の時まで約二百六十年間。

元祿時代

五代將軍綱吉の時代。

文化文政

十一代將軍家齊の時代。

八犬傳

南總里見八犬傳。仁義忠孝禮智信悌の人倫八徳を代表する八犬士の活躍を描いた百八篇の大長篇。

弓張月

権説弓張月。源爲朝を主人公とした物語。

徳川時代に入り、元祿時代になつて、王朝以來久しく抑壓された平民殊に町人が非常な勢を以て頭を擡げ出し、しかして新鮮潑刺の元氣を以て、平安朝式の感情生活をほし、にやるやうになりました。かくして濃艶な、寛闊な、豪華な歡樂をほし、にした元祿時代が生まれ、武士大名より將軍に至るまで、殆ど、この思潮の侵略を蒙らぬはなく、當時の政治家はいづれも大骨を折つてこれを喰ひ止めようとしたが、出来ませんでした。この元祿思潮を生き活きと寫したものが、井原西鶴の浮世草子や近松門左衛門の淨瑠璃などであります。その後文化文政の頃に至り、幕府の政治家等の努力により、元祿思潮の反動として儒教、武士道を本尊とした思想が盛んに行はれました。この時代の理想を描いたものが曲亭馬琴の『八犬傳』『弓張月』を初として、謂はゆる勸善懲惡的の小説であります。

千年を一握りにしたやうな極めて大雑把な話ですが、日本の古文學はざつとこんな具合に進んで來ましたので、かうして見ると、我が國民はいかにも詭へたやうに、片端から自分の具有する諸性質の開發を試み、しかしてその各の性質のこの上なく發達した盛りの面影が當代第一の文學に跡を留めて行つたやうに見えます。この國民性の發展に於ける、變化があり、しかも歸趨のある趣、そしてその文學に現れた具合、これらを靜かに味はつてみると、實に吉野初瀬、松島、耶馬溪、雲仙、阿蘇、室戸、狩勝の景色にも、山海の珍味にも、王侯の富にも、天にも地にも換へられぬやうな心地がいたします。

第三學年雪組岡富女子

純正女子國語讀本 卷五 終

文部省ノ御指示ニヨリ
昭和十三年六月一日一
部修正

昭和十二年七月二十五日印
昭和十二年七月二十八日發
昭和十三年一月二十五日訂正再版印刷
昭和十三年一月二十八日訂正再版發行



純正女子國語讀本改訂版
各卷定價金六十錢

纂者 五十嵐 力
行者 山田 謙 吉
印刷者 五十嵐 良 晃
東京市牛込區原町二丁目四十六番地
東京市牛込區榎町七番地

◆發行所 東京市牛込區原町二ノ四六 早稻田圖書出版社
◆關西特約販賣所 大阪市東區北久太郎町四ノ一六 繪柳原書店

大日本印刷株式會社工場印刷



山陽女子学校
第三学年一組
五月ルリ子